



019603-000-1

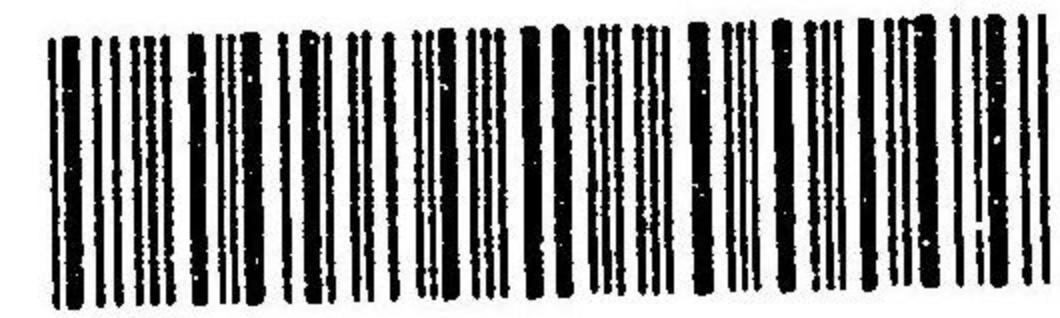
特61-99

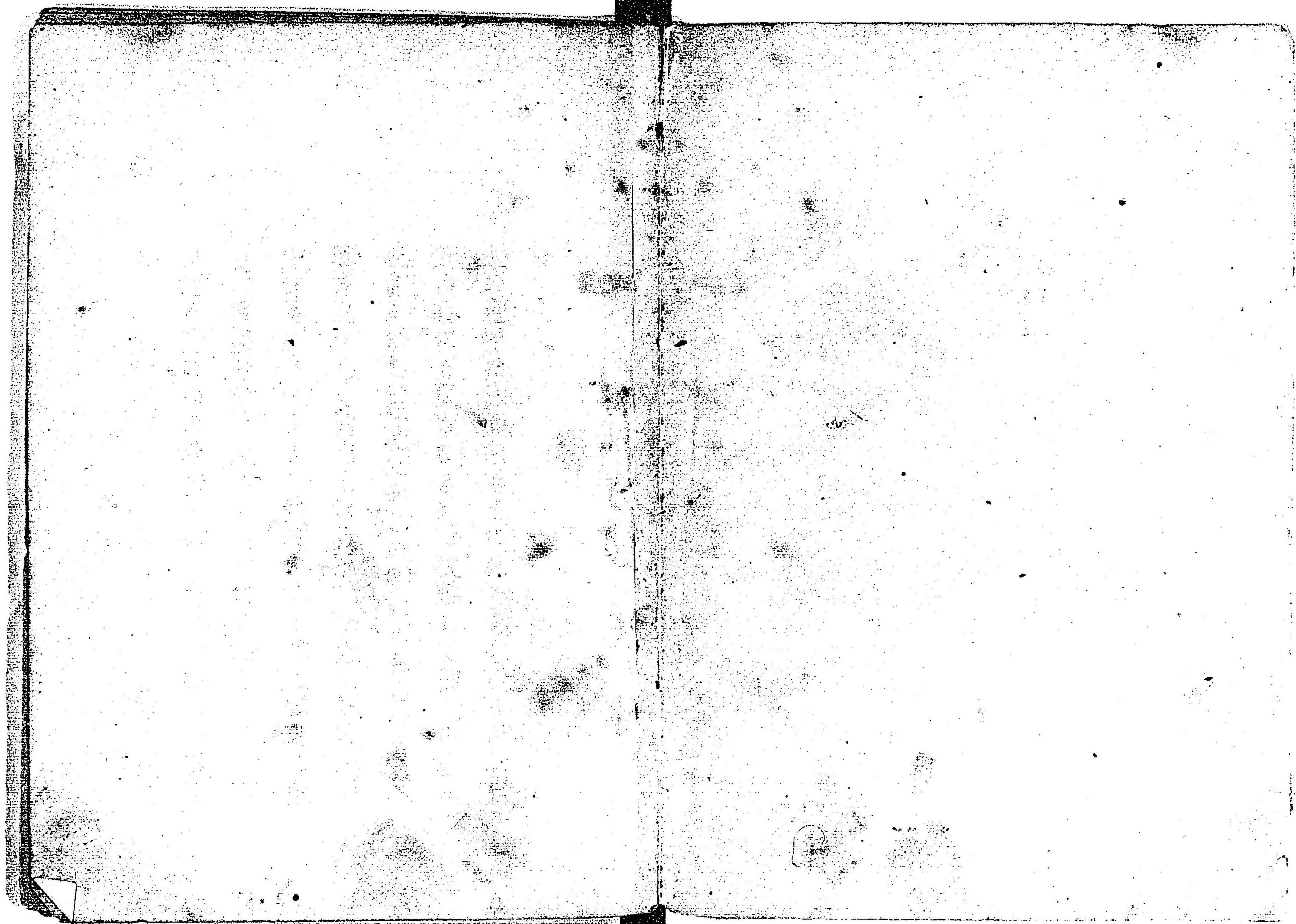
禅学断片

中川 愛氷 / 編

M32.12

ABG-0383





(1)

序

人の世界は面白きものはあらじ、正直は自

分の心にも覺束なきを、吹聴して他人の心に

映さんとし、風流は何れの所にもあるべきを、

寒き思ひむを買出しに行き、馳走は繩煖簾の

中にもあるべきを、無理から山谷の料理に飽

き、衣服は訪ね来る人の目にも觸るゝを、尋

ね行く時にのみ綺羅を飾るなど、寧ろ氣耻し

き事を厲行するものゝ如し、されは寝て居て



も出来る慈善を、寫眞屋に草鞋姿を撮りに行く仁者、俗骨を被布に包んで、頭陀袋に駄句を集むる宗匠、高利貸の利足を車の上に積んで、往來を肩で風を切る紳士、縮緬を腰に巻付けて、月洩る家を覆ふ妻君など、見苦しさもの、限りを、見得を飾り得たるものとして、其骨頂に達するを上等の人といふ、されは品性の劣等なるは、何れの世、何れの國を問はず、上流の人の占領に歸するが如し、故に世

の中には常に齷齪者の住家となりて、忙しき時を正月と心得、女に惚れらるゝを不見識と思ふ如き氣樂者は、恐らくは一人もあらざるべし、此の感情の折にふれて、禪學斷片世に出づ、

明治三十二年十一月大地破壊すと

訛傳せられし日

中川 愛 氷 識

やみの夜に

鳴かぬからすの

こゑ聞けば

うまれぬさきの

父どこひしき

禪學斷片

目次

日之卷

- 人心
- 人心の眞境
- 人の上中下
- 人心満ち難し
- 人心の傾向
- 人心の眞偽
- 人生觀
- 放逸の人
- 忘心と眞心
- 本心と血氣

- 苦心と得意
- 傳心の訣
- 塵心俗氣
- 悠然たる會心
- 依頼心
- 求成心
- 着心
- 小心翼々
- 一念の不二
- 一念の貪私
- 一個の信念
- 觀念
- 念想造成
- 憎念

惜念
 感情
 真感
 逆境と順境
 淡泊と濃艶
 雅俗と濃淡
 俗雅混合
 俗眼と道眼
 無欲と有欲
 多欲と無欲
 慾界と仙都
 美言と危言
 美言と惡言
 善惡と取捨

善處の惡根
 真廉と大巧
 嘘と壽命
 言と實
 嗜欲と塵情
 耻の遠近
 出有入無
 方針
 有義無義の善惡
 有過と無過
 無智の謀
 敵と味方
 仇讐と諂媚

月之卷

物の動靜
 物の適度
 物我の兩忘
 寬平と悠長
 靜者と間者
 冷熱と冗間
 熱鬧と冷落
 忙處と死時
 持盈履滿
 溢と冗
 劇飲と嘔咽
 際遇と情理
 澹泊と肥白
 意の偶會

意介の冲融
 廬陽の茹壘
 三寸の舌頭
 湯水に於ける鏡
 樂屋のどき
 影法師
 蛙
 六情
 莫妄想
 不如意
 無分別
 分別の的外れ
 腹の虫
 飛蟻鷓鴣

無形の樂
 無名無位の樂
 苦樂の境
 苦樂と疑信
 樂の定義
 人の樂む所
 樂中の苦
 苦中の樂
 氣樂の一期
 骨折損
 骨折
 骨淨し
 井戸側の茶碗
 大愚は道の端

猫と傘
 猫に鯉節

火之部

世の重荷
 世味
 世道
 世路難
 世事悠々
 世法に點染
 世の褒貶
 世の中
 世の煤拂ひ
 面倒なる世
 在世の人

當世の風俗
 富と仁
 富爵と仁義
 富貴と泉石
 一生
 和氣熱心
 和氣と喜神
 最上の文章
 詩思と野興
 胸中の空虚
 濃飽と枯寂
 情欲嗜好
 喜憂
 憂勤と澹泊

大事と小事

好利者と好名者
 束縛
 吉人と凶人
 燥性者と寡恩者
 恩義
 施恩
 恩裡害を生ず
 恩怨俱泯
 答に手間入れず
 借金
 眼を閉て色を説く
 本來面目
 無我の境

着眼
卓見

水之部

學者の心
學者の心路
學者の高慢
學者と迂濶
學者と道義
臆病の大徳
阿房の先生
自己
自心
自適
自得

自得の士

自分は留主

自他の過困

會得

會得と破機

會景遠きに非ず

根蒂手に在り

奢者と能者

放逸と豪横

受冥發昭

閑居して不善

表裏の盜

盜に糧を齎す

賊の便化

近いて染ます

橋と端

珍と興

時計と鶏

化け方の巧拙

愚者と財

有のまゝ

食籍

釣水と奕棋

優人と奕者

木之卷

氣度風雅

遠源の要道

進徳修行の砥石

恐るゝ勿れ
精神百倍
進取の氣
捲土重來
立身の歩足
多藏と高歩
一部の眞鼓吹
愆尤駢集る
歸一
主一無適
一色
一段の好色
樓上の一睡
媚説と包容

道徳と功業
 風濤と化育
 君子の大量
 寛厚と忍刻
 有道の心體
 歛束清苦
 儉讓
 道を讓る
 第一個の境界
 完に處らず
 度胸
 獨を慎む
 獨を戒む
 以我轉石

隱士
 至人は皆靜
 山居の胸次
 雲水の趣味
 香巖擊竹
 棲守と依阿
 白雲語なし
 善寂厭喧
 跡を藏すに如す
 空寂と靈和
 去影存心
 萬念灰冷
 萬有皆閑か也
 萬籟寂寥の時

幽邃
 寂寥
 大空
 靜夜の鐘聲
 落花の後
 雨餘と半夜
 名月
 今日
 明日
 光陰消過
 時花早逸
 影外の影
 間靜明暗
 間忙

歸夢
 遂に夢
 極端の同居
 禪教の玄機
 幻境と眞悟
 方圓寬嚴
 玄機
 機會
 空裡の華
 彫謝と眞如
 潔と汚
 美婦醜心
 姪邪の淵藪

天の機軸
 天機を樂む
 天機に一任
 天理路と人欲路
 天理と無心
 天命
 性天と天機
 眞境眞機
 興亡と安危
 迹用と神用
 神味
 教理
 浴油
 心主

心界
 心光
 心の城郭
 心の塵苦
 心猿
 心事と才華
 心事の現空
 心性四段
 心裡の虚實
 心遠き處
 苦心
 疑心
 守り本尊
 中庸

延促と寛窄
 名聞は諸般の敵
 名根と客氣
 努力と使用
 奇持
 澄澈と沈迷
 有爲轉變
 是れ露滅
 浮漚
 眞理
 迷悟差別なし
 禍の根原
 何處にも青山あり
 三つの魂

因果
 果報の遠近
 鬼神
 地獄
 餓鬼
 畜生
 修羅
 人間
 天上
 佛字
 率兜婆
 光明と暗昧
 連達と朴魯
 福禍

禍福と心事
頑空に墮落

土之卷

破れ草鞋

簑笠

洗衣

春の山風

春心

八算の花鳥

筆捨山の秋風

秋の山猿

端つくり

林下の身

法勝寺の糸櫻

棹の歌

足柄の月

草庵の歌

草庵の落首

安心はこりたゝま

粉引歌

附 録

花鳥の卷

法衣に膳

活身の引導

章魚の引導

雀の死生

三途川の渡守

金持と盗人

死せる鰻

僅よ三升樽

不両立

金を貸す心

西瓜と砂糖

空腹と粗食

浪屈せぬ法

美人に念佛

清貧を樂し

場所と會得

花實と虚實

百萬石も笹の露

虚實皮膜の間

人の末期

博徒を養ふ

遊女と誠

勘忍

花顔を焼く

禪學斷片目次 終

禪學斷片

中川 愛 氷 編

目之卷

人心

一休 禪 師

心どはいかなるものといふやらん

すみ繪にかさし松風の音

人心の眞境

人心個の眞境あり、絲にあらす、竹にあらす、而して自ら悟儉す、煙ならず、茗ならず、而して自ら清芬、念淨く、境空く、慮忘れ、形釋くべくして、纒に以て其中に游行するを得、

人の上中下

人に上中下あり、物毎に心をつけ、其道理を一々觀して、そのことを
明らむる人を上の人と云ふ、中下の人は何を見るも心を付けず、うは
のそらにしてすさす、故に物毎の道理に暗し、道具を見るに上々の物
ほど、彫も塗も床までも心をつけて仕たる道具は、上の道具也、草の物
と云ふは細ならざる物ぞ、

天高うして群象正しく、海濶うして百川朝す

人心満ち難し

遠 初道人

眼西晋の荆榛を看て猶白刃に矜り、身北邙の狐兔に屬して尙黄金を惜
む、語に云ふ、猛獸は伏し易く、人心降し難し、谿壑は満ち易く、人
心満ち難しと、信なる哉、

人心の傾向

澤 庵和尚

蟹は甲に似せて穴をほり、人は心に似せて家を營む、されば家に大小
あれば心に大小あり、蓋し心は私にあらず天の心なり、假に身にやど
せり、天心に大小あるべからず、大小は人の著する所にあり、好惡邪
正は氣質の性なり、性を踐むものは死して天に昇り、氣を踐むものは
死して地に降りて必ず地の禍に罹る、佛法に流轉を恐る、如來一代の
教法、祖師歴代の用心、これを本とせり、

金風玉管を吹く、那箇か是れ知音

人心の眞偽

人心の一眞、便ち霜飛ばすべく、城隍すべく、金石貫くべし、偽妄の
人の若きは、形骸徒らに具はり、眞宰已に亡ぶ、人に對しては面目憎
むべく、獨居は形影自ら愧づ、

人生觀

世の中は何にたどへん水鳥の

はしふる露にやせる月影

放逸の人

人皆我飢を知りて人の飢を知らず、故に人を憐むの心なし、我飢を知りては何ぞ人を憐まざらん、放逸の人はたゞ我を知りて、人を知らず、人橋上より過ぐれば、橋は流れて水は流れず

妄心と真心

矜高倨傲は客氣に非ざるはなし、客氣を降伏し得、下つて後正氣伸ぶ、情慾意識は盡く妄心に屬す、妄心を消殺し得、盡して後真心現はる、

本心と血氣

何事もせんと思ふとをすんぞ思切りてするは本心なり、斯うせうかせまじきかと二途に渡るは血氣なり、二途に渡りて分別窮らざることをすれば必ずあし、是血氣に感はさるゝなり、此事をせんと思はゞ一途にしたがよし、二途に渡る程ならばすべからず、初め一氣は皆本心なり、ふたつに渡るは血氣なり、本心ならばみなよし、血氣はあし、

苦心と得意

苦心の中常に心を悦ばすの趣あり、得意の時便ち失意の悲を生ず、

千江同一月、万古悉く春に逢ふ

傳心の訣

鳥語虫聲総て是れ傳心の訣、花英草色見道の文に非ざるはなし、學者天機清徹、胸次玲瓏、物に觸れて皆會心の處あらんことを要す

塵心俗氣

山林泉石の間に徜徉して、塵心漸く息み、詩書圖畫の内に夷猶して、而して俗氣潜に消ゆ、故に君子物を玩び志を喪はずと雖も、亦常に境を借て心を調ふ、

悠然たる會心

花盆内に居り終に生機に乏し、鳥籠中に入つて便ち天趣を減す、若かず山間の花鳥錯り集て文を成す、翱翔自若是れ悠然たる會心、

依頼心

圓通訥和尚

覺者は命杖にあり、杖を失すれば顛る、渡者は命舟にあり、舟を失すれば溺る、凡そ林下の人、自ら守る所なく、外勢を挾んで重きを爲す者、一旦其挾む所を失はば、皆顛溺の患を免る能はず、

庭臺深夜の月、樓閣靜寺の鐘

求成心

成の必ず敗るを知れば、成を求むるの心甚だ堅からず、生の必ず死するを知れば、生を保つの道必らず過勞せず

着心

市人に交はるは、山翁を友とするに如かず、朱門に謁するは、白屋を親むに如かず、街談巷語を聴くは、樵歌牧詠を聞くに如かず、今人の失徳過擧を談するは、古人の嘉言懿行を述ぶるに如かず、

小心翼翼

虚は仁の原となん申す所以は、何を以て之を云ふ、虚心然して後、心を盡す故に、虚心にして而も仁を生ず、故に云ふ、何を以て心に虚空とし、仁を生せんと云ふ、心虚なれば、外以て累をなすことなげんと、亦巽於應無所住而生其心、故に云、あゝ善哉善哉、言ふこと夫惻隱の心は、仁

(8)

のはしなりなんと、孟子の言尤の事かな、あゝ物其死を見れば、こゝに手に粟を生し、深淵に臨めば、茲に戰々兢々とし、薄氷を蹈めば、茲に身は縮緬の如くし、小心翼翼として、茲に初て善心即仁心浮ぶ、又一歩を轉じて解し來れば、單婁の人を見ては、茲に恤んことを欲し、丐衆の乞食て東西奔走するを見ては、茲に物を與へんことを欲し、未だ一日だも此仁心あれば、他の善心浮ばざればなり、人の信用を失ふことはあるまじ、あゝ皆大慈大悲の觀音様とか佛様とか、崇められ、先專一に樂果を得るもの也、邪惡は、之と反し、苦報即地獄の往生、又誰れも欲せざる處、只自ら戒めて善を學ばれかし、さてしかくんと申すも、皆もろ共に心得まれば、只々邪正一如善惡不二皆終成佛道、

門を閉て月を推出す、井を掘つて天を鑿開す

一念の不二

神道に志ある先生は、有相の教を論し、古事のみを覺へて、本意なりと思ふは、大なる誤なり、神書にも諸々の人の有相の、鏡に向へるか如く、清くて清かる心を以て、吾が神明の掟を守れ、鏡の塵を拂はすして、姿の直きことを知ることなし、鏡は心の異名なり、己を盡して天地の事物の一理に歸る時は、四季の變化ありの儘に、造化に順ふべし、此時天地と吾と同根にして、深きこと有べし、魚は水より出て水にて、自由することを知らず、衆生は天地の神内より出て、神を知らず、衆生善惡一念の不二たる理、明かなる時は、神たる事を知る、此時吾に心なし、天に習ひ地に受て、心なかる可しと、耳を覆て神前の鈴を盜むのみ、

(9)

一念の貪私

人只一念貪私なれば、便ち剛を銷して柔となし、智を塞いて昏となし、恩を變じて慘となし、潔を染めて汚となし、一生の人品を壞了す、故に古人貪らざるを以て寶と爲す、以て一世を度越する所以、

仰く處天の闊きが如く、之を窮れば海の深さに似たり

一個の信念

勝海舟

宮本武藏といふ人は、大層な人物であつたらしい、劔法に熟達して居つた事は勿論の話だが、そのみならず書畫にも堪能だと思つて、書いたもの、中に神品ともいふべきのが澤山ある、この人は仇があつたので、初めは決して膝から兩刀を離さなかつたが、一旦豁然として大悟する所があつて、人間は決して、他人に殺されるものではない、といふ信念が出来、それからといふものは、まるでこれまでの警戒を解

いて、何時も丸腰で居たさうな、處が或る時、武藏が例の通り無腰まろこしで、庭前の涼臺に腰をかけて、團扇であふぎながら、餘念もなく夏の夜の景色に見とれて居たのを、一人の弟子が、先生を試さうと思つて、いきなり短刀を抜いて涼臺の上へ飛上つた、武藏はアツといつて忽ち飛退くと同時に、涼臺に敷いてあつた蕙の端をつかまへて引張つた、すると其のはづみに、弟子は涼臺から眞逆様に倒れ落ちたのを、見向きもせず平然として、何をするかと言ひふたばかりであつたさうな、人間もこの極意に達したら、どんな場合に出逢うても大丈夫なもの

観念

いまははや心にかゝる雲もなし

月のいるべき山しなければ

念想造成

人生の福境禍區、皆念想造成す、故に釋氏云ふ、利欲熾然、即是れ火坑貪愛、沈溺使ち苦海を爲す、一念清淨なれば、烈焰池と成り、一念警覺すれば、船彼岸に登る、念頭稍異れば、境界頓に殊なる、慎まざるべけんや

少林無師の句、曹溪絶學の禪

憎念

憎むとて憎みかへすな憎まれて

憎み憎まれはてしなければ

惜念

また見んとおもひし時の秋だにも

今宵の月がねられやはする

感情

長月の紅葉の上に雪ふりぬ

見る人誰ふことの葉のなき

眞感

人知れずめでし心は世の中の

たい山賤のあきの夕ぐれ

林に入つて草を動かさず、水に入つて波を立てず

逆境と順境

逆境の中に居つては、周身皆鍼砭藥石、節を砥し行を砥して覺えず、順境の中に處らば、滿前盡く兵刃、戈矛膏を銷し骨を靡して知らず

澹泊と濃艶

澹泊の士は、必ず濃艶の者に疑はれ、檢飾の人は、多くは放肆の者の爲に忌まる、君子此に處して、固少しく其操履を變すべからず、亦ただ其鋒芒を露はす可らず、

雅俗と濃淡

衰冕行中一の藜杖的の山人を看れば、便ち一段の高風を増す、漁樵路上一の衰衣的の朝士を看れば、轉た許多の俗氣を添ふ、固に知る、濃は淡に勝たず、俗は雅に如かざる也、

俗雅混合

金は鑽より出で、玉は石より生ず、幼にあらざれば、以て眞を求むることなく、道酒中に在り、仙花裡に遇ふ、雅なりといへども俗を離る能はず、

月は碧山に隨うて轉じ、水は青天に合して流る

俗眼と道眼

天地の中、萬物人倫の中、萬情世界の中、萬事俗眼を以て觀れば紛々各異り、道眼を以て觀れば種々是れ常、何で分別を煩はさん、何ぞ取捨を用ひん、

無欲と有欲

澤庵和尚

無欲は人の貴ぶ所なり、有欲は人の賤む所なり、然りと雖も有義の欲は無欲に勝れり、無義の無欲は有欲に劣れり、有功と無功となり、有欲にして施すことを知る者は義あり功あり、人として犬馬の如く金銀を見る者は義なく功なし、金銀は寶なり、豈貴ばざらん乎、豈欲せざらん乎、然れども布用ひざるときは則ち瓦の如き而已、

多欲と無欲

多欲の人は却て無欲なり、多欲の人多く財を得んと思ふて、中を越えて多なる故に、集めたる財を一時に官に奪はれ、剩へ其身を亡す、則ち財を奪はるゝのみならず、一つある命を添へて失ふ、則ち多欲の人は無欲の人也、小欲の人は其分に随つて得る所の財をよく保つて、其身を全ふして天命を終ふ、これ多く財を得るなりと思へり、されば多く財をあつむるを當と云ふことは、總してあるまじく、天下の者皆貧人たるべしと云ふに似たれど強ちに然らず、その中を得る時は則ち富も亦得たり、その儀も亦得たり、貧なるときは則ち貧も亦得たり、天下何ぞ貧人たらんや、故に曰く、不義にして富み且つ貴きは我において浮雲の如しと云へり、義にあたるときは則ち何ぞこれに悪あらん、

秋水涓水を吹けば、落葉長安に滿つ

欲界と仙都

山林は是れ勝地、一たび營戀すれば便ち市朝と成す、書畫は是れ雅事、一たび貪癡すれば、便ち商賈と成す、蓋し心染着なければ、欲界是れ仙都、心係戀あれば、樂境を苦境となす、

美言と麤言

烏鳶の卵毀はすして後鳳凰集る、誹謗の罪誅せずして後良言進むと云ふこと真なるかな、鳶鳥の卵を育て、何にせうかなれども、君子は物を捨てず毀たぬがよい、悪を捨てされは善は至るものぞ、烏鳶の卵をへすてされば鳳凰は集るなり、人それ我を誹る、其誹るを罪すべからず、誹謗の罪を誅せざれば良言を聴くが、ものゝ云ひ損ひを尤むれば、人言を慎んで言はざるものなり、君子は雜人のむさとしたること言はせてうつけたる顔して聞くもよい、雜人なれども自得の心より出る理

言はあるものなり、僞言は聞きてさかす、美言は聞きてこれを記すときは、則ち損無くして得あるなり、

美言と悪言

美言悪言と云ふことなまものなり、時に遇ふ人の言ふことは、悪言なれどもこれを美とし、ときに遇はざる人の言ふことは、美言をも悪とす。然らば則ち美言悪言はない、人に就くと見えたり、時に遇ふと遇はざるとは、富貴と貧賤となり、されば人となりて物云ふときを待つべし、時至りて云へば人これを用ひ、時至らずして云ふことは人これを用ひず、時至らずして言ふときは則ち孔孟の語と齊くとも人これを用ひず、人非人の言或は五七歳の小童、貧窮孤獨の言なりとも、美言あらば聞きて以て身に就けてその得あり、貴介公子の言なりとも、僞語悪言をば心に捨て身を省みるときは則ち身に得あり、三人行くとき

は則ち皆我師なり、匹夫匹婦の言をも捨てされば好き語必ず我に在るものなり、

金屑は眼中の翳、衣珠は法上の塵

美悪と取捨

之を用いても理に當らず、之を捨て、も理に當らず、これ今時の人なり、用ゆる時は則ち其悪を知らず、捨つる時は則ち其悪を知らず、捨つる時は則ち其美を知らず、己に順ふときは、則ち悪人と雖も之を用ひ、己に違ふ時は、善人と雖も之を捨つ、

善處の悪根

悪をなして人の知るを畏るゝは、悪中猶善路あり、善をなして人の知るを急にするは、善處即ち是悪根、

直廉と大巧

直廉は廉名なし、名を立つる者は、正に以て貧なる所以、大巧は巧術なし、術を用ふる者は、乃ち拙となる所以、

高く毘盧頂に歩して、釋迦の文を稟けず

嘘と壽命

柳里恭

學恣國師の書かれたるものに、人は長生せんと思は、嘘を云ふべからず、嘘は心をつかひて、少しの事にも心氣を勞せり、人は心氣だに勞せざれば、命長きこと疑ふべからず

仙人は不養生せず腹立てず

物はしからずそれでなが生

言と實

山林の樂を談する者は、未だ必ずしも眞に山林の趣を得ず、名利の談を厭ふ者は、未だ必ずしも盡く名利の情を忘れたるに非ず

嗜欲と塵情

風月花柳なければ造化を成さず、情欲嗜好なければ、心體を成さず、只我を以て物を轉し、物を以て我を役せざれば、嗜欲天機に非ざるはなく、塵情是れ理境、

鶴は飛ぶ千尺の雪、龍は起つ一潭の水

耻の遠近

名所舊跡を見ることを好む人は、目を樂ましめて脚を苦ましむ、食を願ふ人は舌を樂ましめ心を苦ましむ、之を求むるに心を勞せざれば食足らず、衣は輕さを求め、居は易さをもとむ、人は身を樂ましめば心

を苦む、心を苦めずして軽きを衣、易きに居ることは難し、身を樂ましめたるものは耻に近く心を樂ましめたるものは耻に遠し、

出有入無

水流れて境聲なし、喧に處し寂を見るの趣を得、山高うして雲碍へず、有を出で無に入るの機を悟る、

方針

とし鳥やかもめともまた見ぬわかぬ

たてる波間にうき沈むかな

清流間斷なく、碧樹會て凋まず

有義無義の善惡

有義の善惡は、善惡共に善なり、無義の善惡は善惡共に惡なり、人を

敗るは惡に似たりと雖も、義を以て人を敗り惡を懲し、義を以て人を成すときは善を勧めるなり、惡を懲して人をして善に進ましむ、勸善は人をして善を益さしむ、惡人と成り、善人を敗る、成る所、敗る所、總て是惡徒無義也、

有過と無過

人を責むる者は、無過を有過の中に原せば情平か也、己を責むる者は、有過を無過の内に求むれば徳進む、

無智の謀

大なる蜘蛛の檐にかゝりたるを地に落せば、足を收め石の如く成りて死を遁れんことを計る、彼か小智にて人を計らんとす、少しなりとも走り遁るればその程も存命すべし、彼が謀計は人よく知れり、彼は思ふべし、人は知らじと、無智の人を計ることも蜘蛛の謀畧に同じ、

敵と味方

敵をば怖るべからず、身方を怖るべし、初めより敵なし、身方を敵とする、敵に思慮を施せば身方なり、身方恨を含めば即ち敵なり、恩少く恨多きときは、即ち何の所にか身方あらん、天下敵なり、

仇讐と諂媚

小人と仇讐するを休めよ、小人自ら對頭あり、君子に向つて諂媚するを休めよ、君子原と私惠なし、

火は日を待たずして熱し、風は月を待たずして涼し

月之巻

物の動靜

卑きに居て後高に登るの危きを知り、晦に處して後明に向ふの太だ露るを知る、靜を守つて後動を好むの過るを知り、默を守つて後多言の躁たるを知る、

物の適度

毒物を食し病を引出すも口惜し、味に耽り病引出す人數多あり。愚痴の甚だしきにあらざれば狂なり、それ飲食は色身の枯衰をうるはし養ひ、世に長生へて己々道にす、み、立身行道して素望を遂げんための藥なれば、過不足なく程よく飲食してこそ藥なれ、過ぐれば毒となりて遂に色身を害す、是等のことよく心得ある國手にも、飲食より病因

を生じ、遂に天死して不忠不孝の人となるあり、人々よく嗜むべきこととなり、

物我の兩忘

簾櫳高敞、青山綠水の雲煙を吞吐するを看て、乾坤の自在を識り、竹樹扶疎、乳燕鳴鳩の時序を送迎するに任せ、物我の兩忘を知る、

朝には雲の片々たるを見、暮には水の潺々たるを聞く

寛平と悠長

先を争ふ的の徑路は窄し、退き後ること一步すれば、自ら一步を寛平にす、濃艶の滋味は短し、清淡一分あれば、自ら一分を悠長にす、

靜者と間者

風花の瀟洒、雪月の空清、唯靜者之が主となり、水木の榮枯、竹石の

消長、獨り問者其權を操にす

冷熱と冗間

冷より熱を視て、然して後熱處の奔馳益なきを知る、冗より間に入りて、然して後間中の滋味最長きを覺ゆ、

熱鬧と冷落

熱鬧中一冷眼を看れば、便ち許多の苦心思を省き、冷落の處一熱心を存せば、便ち許多の真趣味を得、

山は新晴の雨を帯び、谷は閏月の花を留む

忙處と死時

忙處性を亂さいらんとせば、間處に心神養ひ得て清かるべし、死時心を動かさいらんとせば、生時に事物看得破るべし、

持盈履滿

老來の疾病は、都て是れ壯時に招く、衰後の罪孽は、都て是れ盛時に作す、故に盈を持し、滿を履むは、君子尤も競々、

溢と冗

歲月本長うして忙しき者自ら促り、天地本寛くして鄙しき者自ら隘し、風花雪月本間にして、勞攘の者自ら自ら冗なり、

劇飲と嘔咽

寶明雲の如く集り、劇飲淋漓として樂めり、俄にして漏盡き燭残り、香銷ぬ茗冷かにして、覺ぬす反て嘔咽を成さん、人をして索然として味無からしむ、天下の事率ね之に類す、人奈何ぞ早く頭を回さらん、

只途路の遠きを知つて、覺ぬす又黄昏

際遇と情理

人之際遇齋あり不齋あり、而して能く己をして齊ならしむ、己之情理順あり、不順あり、而して能く人をして皆順ならしむ、此を以て相對治せば、亦是れ一の方便法門、

澹白と肥白

藜口莧腸の者は、氷清玉潔多く、衰衣玉食の者は、婢膝怒顔を甘んず、蓋し志は澹泊を以て明かに、節は肥白より喪ふ、

意の偶會

意の偶會する所便ち佳境を成す、物天然に出でて纔に真機を見る、若し一分の調停布置を加へば、趣味便ち減ず、白氏云ふ、意無事に隨ふて適し、風自然を逐うて清し、味ある哉其の之を言ふや、

意介の冲融

雪夜月天に當つて、心境便ち爾く澄徹、春風和氣に遇ふて、意界亦自ら沖融す、造化人心混合間なし、

風花紫翠を亂し、雲外煙林あり

盧陽の茆室

永覺禪師

土を闢いて茅を建つ、基を築いて平實を尙ふ、横架三間あり、東西兩翼を張る、茅を編んで煎り齊ふるに似たり、柱の直き箸の直きが如し、外籬は盡く空疎、内壁は完密なるべし、既に斧鑿の痕なく、也た舟楫の飾を省く、牖を開いて吐吞に任せ扉を設けて出入を慎む、以て苦霜を避くべし、以て烈日を避くべし、顯者宵て來らず、俗士何に由つて集んや、惟無事の僧のみあつて、終日長に膝を抱く、或時は門を出で、去り、手一柵の栗に扶る、或時は門に入り來る、雲箋並に兩笠

至れば且つの高歌し、備發すれば更に偃息す、呵々別に天有り、廣大眞に匹し難し、語を寄す未師の人、世事何の時にか擧らんや、擧つて後始めて山に歸らば、臍を噬むとも恐くは及ばざらん、

三寸の舌頭

三寸の舌頭禍門を開き、河沙諸佛轉た多言、夜來百勞五更の月、奈んせん聲々夢魂にたゝるを、

湯水に於ける鏡

鏡を水に入るゝときは曇りて見ぬす、湯に入るゝときは明かなりとは何の謂ぞや、火の源を益して以て陰翳を消す、水の主を益して以て陽光を制む、

松に古今の色なく、竹に上下の節あり

樂屋のぞき

あそこなる物取りて来よと云ふに、言ふ人の顔を見るは利根のものなり、言ふ人の顔は見ずしてあそこへ行けども、終に云ふ人のいふ所に向はず、鈍利かくの如く違ふなり、猿樂の能するに鼓打一つ聲をうてどもうてども、大夫出てず、かゝる時鼓打待兼て、樂屋を頻に見ること、最も見にくし、樂屋を見ずして芝居を見れば、人の顔の色にて出るか出ぬかは能く知らるゝと云ふ、

影法師

殘夢と言ふ者月夜に浮れ出て庭に有り、其影法師殘夢に謂て曰く、我は汝が影法師なり、汝步行けは我も歩行み、汝止れば我も止る、動靜周旋汝が爲すまゝに附從へども、たゞ異なる所は、汝は常に苦勞に心を勞すれども、我は苦ども樂ども知らず、汝は飢えたりとて、我は飢る事

を知らず、汝は我を以て外物とするか、我は汝を汝とせず、我を我とせず、素より彼我の念なければ、有とて無ども思慮にわたらず、彼を彼とし、我を我とする故に、妄想分別の病を生じ、佛と衆生を二つの物と思ひ、迷悟有無の二見を發して、各別不融の忘情盛んにして、種々の顛倒苦痛あり、昔しより正直の佛菩薩の、活きてはたらきたまふを拜み、或は極樂の快樂をあり〜と見遂げて、又は地獄にて罪人を呵責する体相を目前に見たる、冥途の物語多く書に著はし、世の人口に膾炙すれども、是れ皆方便説になづみ、幻化を認めん真情と思ふ忘情より、さま〜の化物のあらはるゝ也、

相逢うて相識らず、語つて名を識らず

蛙

鯨鯢を釣るに慣れ咲一場、泥沙歩を碾して太だ忙々、憐むべし井底尊大を稱す、天下の衲僧皆子陽、

六憎

金持つて高ぶるはど憎きはなく、書を見ずして物隠り顔するほど憎きはなく、人に物をやりて恩に着せるほど憎きはなく、吝きはど憎きはなく、慾ふかきはど憎きはなく、人をそねむはど憎きはなし、

莫忘想

藤 氏 女

子一休の爲に遺書せるもの

我々娑婆の縁つき、無爲の都に赴き候、御身よき出家に成りたまひ、佛性の見をみがき、其の眼より、我々地獄に落ちるか落ちざるか、不断添ふか、添はざるかを見玉ふべし、釋迦達磨をも奴どなし玉ふ程の人に成給ひ候はゞ、俗にても苦しからず候、佛四十餘年説法し玉ひ、遂に

一字不説どのたまひし上は、我ど見、我ど悟るが肝要に候、何事も莫忘想、あなかしこ、

九月上旬

かへすくも、方便のせつをのみ守る人は、くそ虫と同じ事に候、八万の諸聖教をよみても、佛性の見をみが、ずんば、此文はどの事も解しがたかるべし、

これとてもかりそめならぬわかれては

かたみとも見よ水壺のあと

目前に異路なく、脚下に青天なし

不如意

朝夕の飯さへこわくやわらかし

思ふまゝにはならぬ世の中

無分別

宗

鑑

白露や無分別なる置どころ

分別の的外れ

道に到らんとする者は己の智慧を用る事勿れ、智慧分別にて爲すこと破れる事にて考ふ可し、聖賢の書は道に到るの船なり、道に到る時は書に用なし、五常を守る人には孔子もいらす、守らぬ穴より教起り、法度の立事也、薬は病を治するの良物なり、病人無き家には醫者もいらす、病なき人に薬を用ゆれば、薬毒滞り癖病となり一代の病となる者也、大河を渉る者は先づ船を頼む可し、向の岸に着く時は船に用なし、若々船賃々々、

枕を失して驚いて先づ起つ、人家半夢の中

腹の虫

世にたつと願ふ人も、世を棄つるをおもふ人も、其あるじとせるはじめの心、一筋にかはらず思ひ及ばさは、何事も成就せでやあるべき、地にたふるものは、地によつてたつと申す事も侍れば、そのなす業其うけ得たる道にたがへぬこそ、ものゝむなしからぬはじめなりや、舟に舟あり、松に松虫あり、いも虫は芋に生じ、菜虫は菜に生ず、米虫を虚空藏といへるは、米をはちさと云へるより申しならはしたるが、酒虫をまた狸々と云へるもをかし、蓼喰ふ虫の蓼を、しむも、蟪蛄といへる虫の、蚊の睫に巢を工むも、其生れ得し古郷の木樵山かつは、螻蛄の斧の柄も朽なん世を願ひ、みるめも寒き蟹か手業も、あるにかひなき住處に苦しめられて、寄居虫の虫の春立つはへもあらじかし、杉の梢になく蟬の春秋さへ見ず、草の庵の燈火に片羽焦るゝ夏虫も、

蟬蛸の夕を知らず、蟻のつみたる塔も、風に破れ月に消えて、天地の造化にあらたなり、無爲を爲よし、無事を事とせんとは欲すれども、またそのものくは虫あり、槃特に愚痴の云あり、佛に慈悲の虫あり、伯夷叔齊は忠臣の虫にくはれて首陽に飢餓、玉造の小町は傾國の虫にくはれて、みちのくにさまよふたるも、みな腹の虫のなせる業ながら、何某の尻が橋に執し、佐國が蝶と化したりし、おのれが心おのれをこなふ、おろか心にははるかにまして、哀れなるかたなるべけれ、虫よ虫、世を秋の野の露はたのみても、蝸牛の家を離れ侘、みの虫の篋も雨もりて、たのむ木陰は寒くとも、自我蜂の子の一筋にうけ得し道を違へずば、後世の道は何か苦しかるべし、

十方虚空なく、大地寸土なし

飛蛾鷓鴣

寵辱驚かず、閒に庭前の花開き花落つるを見る、去留意なく漫に天外の雲卷き雲舒ぶるに随ひ、晴空朗月、何れの天か翱翔すべからざらん、而るに飛蛾獨り夜燭に投ず、清泉綠井、何れの物か飲啄すべからざらん、而るに鷓鴣偏に腐鼠を嗜む、噫世の飛蛾鷓鴣たらざるもの、幾何人ぞや、

無形の樂

塚本貞治

私の所有に荒地が五六町御座りますので、平生から何か近邊の貧民の爲になるやうにつかひませうと存じて、いろ／＼考へて見ましたが、初めは之を開墾して、地代なしで作らせうかと思ひましたけれど、併し一寸考へる所がありました、この荒地へ澤山の櫻を植ゑ付けました、全体此邊の貧民等は、春が來ても吉野の花見にも行けません、秋が來

たどて楯の尾の紅葉を觀られる境界でもなく、年中汗をたらして苦勞するばかりで、一寸も慰みといふものがありませんから、實は彼等の春の樂みにもと存じまして、櫻を植ゑました譯ですが、今はその櫻も餘程大きくなりましたして、村中唯一の快樂の場所となりましたして、一つの公園が出来ました、一体人間にはこんな無形な快樂といふものも、是非何かなくてなりませんから、そこで斯ういふ風な考へを起しました譯で、少しばかりの地所を無代で貸してやるよりは、結局此方が餘程のためになりませうと存じます。

江山千里の舊、賓主一時に新たなり

無名無位の樂

人名位の樂たるを知つて、無名無位の樂の最も眞なりと爲すを知らず、

人饑寒の憂を爲すを知つて、饑えず寒からざるの憂、更に甚しとなすを知らず、

苦樂の境

君子は樂みをもとめず、樂み窮る時は苦必ず來る、況やまた耻あるをや、先づ樂みをもとめて、樂みの前に於て苦を積まざる時は、即ち樂みきたらず、樂みきたるときは、苦み樂中に伏し來りて、その樂みの窮るとき其の苦則ち顯はる、樂をもとむるにその樂の前に於て苦をつひ、是れ人料理をなして食するが如し、朝より之を營んで暮に至つて之を食し、或は前日より營み、前々日より營んでその樂半時に過ぎず、營む人は苦む、食する人は樂む、これ樂みの前に苦を積むにあらずや。

苦樂と疑信

一苦一樂相磨練し、練極つて福を成すものは、其福始て久し、一疑一信相參勘し、勘極つて知を成すもの、其知始めて眞、

雪消ぬて山骨露はれ、雲出て、洞中明かなり

樂の定義

澤庵和尚

上品の樂は樂なきなり、苦もなく樂もなきを上とす、これ寂滅爲樂なり、其次は中にして、一切の事中を以て樂とす、如何となれば寢るは又寢てばかり居るを苦と思ふ時起るは樂なり、然るをまた終夜起きて居よと云は、又起るを以て苦とす、起臥ともに中を得るを樂とす、過ぐるときは則ち共に苦なり、甘草はあまくして人皆食ふ、甘草なりとも日夜食せよと云は、その苦しさこと黃連の如し、久しく居ると

きは則ち立つを以て樂とす、立つこと久しきときは則ち又苦なり、その中を得て以て樂とす、飢えては食を願ひ、食をもつて樂とす、飢うときは則ち食を以て苦とす、中を得るときは則ち是眞の樂なり、物を見て目を悦はしめ、久しく見るときは則ち苦なり、中を得るときは則ち樂なり、萬事共にかくの如し、然るときは則ち中これ樂なり、その次の樂は足ることを知るなり、たるをしろものは寡さを以て多しとし、足るを知らざるものは多さを以て寡しとす、足ることを知らずして願ひあるものは一生苦み、足ることを知りてもとめなきものは貧を以て樂む、人皆貧をくるしむ、然るに貧をさへ樂むときは則ち何の苦かわらん、則ち是を樂とする故に樂と爲る、故に足ることを知るは極樂の國なりと云へり、その次は小人の樂なり、言ふに足らざる而已、

本來位次なし、何れの處にか蹤由を覓めん

人の樂む所

澤庵和尚

高麗唐土の珍器異具、願ひ求めてこれを愛する人は尤も人の常なり、吾此に望みなし、吾人間に心なく、貴介公子と交はり、花の下月の前に、會席を設け茶香の遊ひによつて日を過さんと思ふ心なし、一間の茅屋に紙被まを綴り、一領の綿衣を身に纏ひ、僧形を破らざるのしるしを表して、生を送り死待つの外あらまじきと思へばなり、さながら又物の善惡知らぬはどの心にもあらねば、一旦は眼をうるはすることあれども繼て求め願ふ心なし、我一得のたのしみなり、願ひ求むる人の苦なり、今大人のために引出されて人間に在り、予が樂みにあらずるなり、

樂中の苦

此は是れ嬰曇の會て經る所、麻衣草座六年の情、一朝點檢將來を見よ、寂寞たる雪山身後の名、

苦中の樂

酒は三盃を喫して未だ唇を濕さず、曹山の老漢孤貧を慰む、直に身を大宅の中に横へて看よ、一刹那間萬却辛し、

詩は會人に向つて吟じ、酒は知己に逢うて飲む

氣樂の一期

念佛坊主

隱居一枚起請

もろこし我朝のもろくの智者達の致し申さるゝ隱遁の隱にもあらず、又學問して道の心を悟りていたす隱遁にもあらず、只不用の者の

爲には、世の妨となるまじとさへ心得れば、疑ひなく氣樂なるぞと思ひとりて、隱居するより外別の仔細はさむらはず、但し肝心の心わたりと申すことの候へども、みな衣食住のうちにもこもり候なり、この外に慾深きことを存せば、諸人のあはれみにもはづれ候ふべし、假令鹿をかぶり糟糠を嘗め、人の軒端に臥せるども、食うては寝、食ふては遊ぶ、君が代のありがたさを忘れれば、身は安樂になりたりども、生きたる甲斐もあるまじく候、あなかしこ

來て見ても來て見てもまた同じこと

こゝらでちよつと死んで見ようか

春至つて自ら花開く、朱顔安くに在る

骨折損

世の中の有様を考ふるに、犬骨折て鷹にとらるゝと云ふ體尤なり、昔より唐土にても青龍刀振廻し、赤顔して騒ぎ廻る先生を初として、さもなき者に濡手で淡をつかまれ、本朝にても近江の水海一夜の内に飛出して、駿河の松原にけるゝとして、是を富士山と云ふなり、人聲赤人、西行の宿なしとなられたるもみな梶原が惡と知るべし、世のわたりに溺れて、金の番する親仁も、野暮の風耳を掘明て聽聞あるべし、この身終る時は他人のものど成り、阿房な忤ありて、色里の埋草となり、行衛もしれぬ我思ひかな、夫は喰す貧樂坊の説法富士も烟たてるが、先祖への孝行、他人の物となる時は他人が悦び、忤が阿房なれば色里のうるはいとなる事と、摺小木持て立上れば、鬘々は袖にすがりつき、こなた百までわしや九十九まで、

骨折

財寶も骨を折つて手間を入れたるは遅く盡るなり、骨を折らず手間を入れずして得たる財は早く盡るが、色を塗りわくるに久しくして、返を重ねたるは遅く、疾く塗りて返を重ねざるものは早く剝ぐるが、

臥龍終に奮迅し、丹鳳便ち翱翔す

骨淨し

一休禪師紫野におはせし時、宅間何某御心やすく参りて物がたりのついでことに、御異見申やうは君には尊き御僧にておはしませども、餘りに打つけに人を教化し給へば、在俗の輩は物いまいなをいたせるものどもばかりにて、かへりて弘通に便りよからで志しあるものはては遠ざかり侍るなり、不凡のやからは格別、凡夫にはかくめでたき事を申させ給はりたし、さあならば悦びて歸依し参らする者多かるべし、な

べて人はよろしきことは己れがこと、はかりおもひて、あしきことはみな他人のうへとのみ心得るならひにて侍るがと申したるに、禪師こたへてよし、心得たりとて筆をとり給ひて、

佛家に住在すればいましめを以て本とし、三寶の海に入ればまことを以て本とす、身死して巖根にありては骨また淨し、と書してこれより外に、めで度ことはしらすとの給へりとかや、

雨を聴いて寒更に盡き、門を開けば落葉多し

井戸側の茶碗

コレ、童子、空があふない、天道様に矢が當ると國土は開、いたづらせまい、學文風雅いらぬもの、其方の祖父はの、一文取から組職て北海を動かす程の富限、勝手より賀茂川はどの白水が瀬を分て流れ、

風雅と云ふことは、曉の夢にも知らず、親仁の代になり、學文して小智に化され、不形の文字書く阿房、風雅な文字並べる今刺、木綿の袋かけた貧乏神の末社ども入込、俳諧の會は川中島はを押かけて、流しの水下にて家の流れる事數を知らず、さるに依つて家屋敷いづれの所にか有る、今掃溜に富士の山はをの捨土に薄延ひて 伊豆山の黒木石の並べてあるは、皆貧乏神どもの墓印なり、町人百姓の學問風雅は心得べき事なり、この時落て粹者とはなる者なり、爰に一つ教がある、膾はひしこを厭ず、米は黒さを得とし、魚のあざれて香の悪さは鹽にすべし、鳶飛んで空に遊ぶ時は油揚の油斷すべからず、魚の淵に踊る時は、屋形船の夜更る事を考へ、君臣に義理あつて佛餉袋の柔らかなる事を知り、父子恩あつて勘當の肌寒さを覺へ、夫婦に法界あつて摺鉢の音を觀じ、朋友に信あつて蒲燒の直段を知る、是みな法華經

の教にして、昔より諸々の賢き人の紙屑に書殘したる糟粕あり、心ある先生は云すと聞すと知れた事、然らば放持になりとも、阿房になりとも、勝手次第に遊ぶべし、我があづかる事にはあらず、細見に委しき人は戀の淵にはまり、川越しの川で果て、醫者殿の食傷、うつかりとして井戸側の茶碗、

好事門を出です、惡事千里を行く

大愚は道の端

これく童子吾等が愚の至りにて、熟々世の變化を考ふるに、三社の詫など床に懸て、持佛に線香の烟り絶間なく、見苦るしけれ共位牌の多き家は、福貴なる物と知る可し、親子兄弟夫婦睦じく、家來を憐み、理屈を離れて笑ひの有る家には、摺鉢の破れる音もなく、飯喰て箸を

頂き、天道を拜む人を、天下の得民高上の親仁と言ふ可し、下は愚智文盲を以て大得とし、上たる君子は大智を以て大得とす、大明なる時は日月暗し、天闇き時は日月明か也、少し智恵有は得を損し、理屈に化されて公事沙汰起り、家を失ふ者也、小智は道の妨げ、大愚は道の端なり、己己を責むる時は、生死にはたり、己己を樂む時は生死にはたらず、然は彼の親仁も、生れた事も知ねは、死ぬ分別もなし、覺た事なければ、忘るゝ氣遣もなし、實に夫よ學問故に石に成た佛も有、いつか理窟を離て、ほんに本の阿房と言れるならば、今は昔の笑草、

猫と傘

猫と傘とはよく失ふ物なり、用心あるべし、先の有家を尋いだすといへ共、さして公邊の沙汰もなし、金と女房を鹿末にする時は、人どうなづいて走るものなり、それ故夫婦暮しの君子も手づから水汲飯焚て

昔の翠爪詠る事也、金を守る親仁も、その爲に一代つかかはれて、聊死期にくるしみ、跡は親類の修羅起り、佛にうら見たく、寺參もせぬ事あるものなり、夫は持ぬ沙汰の云ふ事、此柳下駄は何處でかりてうせたや、

猫に鯉節

猫を飼ふもの多くは猫をやしなふ事を知らず、飯を與ふるに鯉節を入れ肉味を食ふ、猫は常に原味を食とする時は鼠をとらず、猫は麥をたきて味噌汁をかけ與ふべし、その他の食を與ふべからず、常に肉食にならばすれば、肉なきときは、必ず他の家にいたりて魚肉を盜めり、人を養ふも亦復しかり、

萬人膽仰の處、江日天心に到る

火之卷

世の重荷

徳川家康

人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し、いそぐべからず、不自由を常とおもへば、不足なく、心に望み發らば、困窮したる時を思ひ出すべし、堪忍は無事長久の基、怒りは敵とおもへ、勝つ事はかり知りて、負ることを知らざれば、害其身に至る、己を責て人を責るな、及ばざるは過ぎたるより勝れり、

怠らず行かば千里の外も見ん

牛のあゆみのよしおそくとも

世味

飽くまで世味を諳んずれば、覆雨翻雲に一任して、総て眼を開くに憚

し、人情を會盡すれば、牛と呼び馬と喚ぶに隨教して、只是れ點頭す

世道

道元禪師

水鳥の往もかへるも跡たえて

されども道は忘れざりけり

世路難

思ふこと一つ叶へばまた二つ

三つ四つ五つ六つかしの世や

一點梅花の葉、三千世界香ばし

世事悠々

憤るべき、哭すべき、曷ぞ究極あらん、且つ爾く生真面目なる顔する
勿れ、來れ、共に腹をかへて哄笑せん、世事悠々、

笑ふにも涙こぼるゝ世の中に

泣きつゝゑめる人もありけり

世法に點染

山肴は世間の灌漑を受けず、野禽は世間の糞養を受けず、其味皆香にして且列なり、吾人能く世法に點染せられざれば、其の迥然として別ならずや、

世の褒貶

意を曲げて人をして喜ばしめんより、躬を直うして人をして忌ましむるに若かず、善なくして人の譽を致すは、悪なくして人の毀を致すに若かず、

山は岳邊に向つて止まり、水は海上に流れて消す

世の中

世の中は貧じや有徳じや苦じや樂じや

なんじやかじやとて末はむちやくちや

世の煤拂ひ

芭

蕉

明ばの、空より物のはた〜と聞ゆるは、疊をた〜く音なるべし、けふは師走の十三日、すゝはきのことぶきなり、げにや雲井の規式、九重の町の作法は、嘉例ある事にして、只みな〜の人の煤拂こそいとをしかれ、おの〜門さしこめて奥の一間を屏風にてかこいなし、火鉢に茶釜をかけて、嫗が帷子の上はり、爪さきのみぬたる足袋もいと寒く、冬の日かけのはやく晝になり行、庭の隅調度ども取ちらしたる中に持佛のうしろむきたるる目には立なれ、家の童子の縁の破れ簀子の下を覗きまはるは何をひろふにやとあやし、味噌とよはるゝ大男の

袋かぶり、蓑着たるもめづらかに、米櫃のサン、うち付組、しらけ行
燈はりかへて、田つくり、淺つけのかはりはなやかに、かみしもの
膳居ならべたるに、はどなく暮て高軒とはなりぬ、

煤拂やくれ行宿の高軒

三日相見ざれば、舊時の看をなす勿れ

面倒なる世

白隠禪師

此世へ客に來たと思へば、樂も苦もなし、心にそみたる食事にあふて
は、好き馳走と思へ、心にそまぬ時も客なればほめてくはねばならず、
夏のあつさも客なればこらへねばならず、冬のさむさも客なればこら
へねばならず、孫子兄弟にも客なればそれくにあいさつせねばなら
ず、心のこさすおいとま申すがよし、

父母によばれへかりの客に來て

○ 心残さずかへる古里

平生の身持にはしや風呂上り

在世の人

憂き事の品こそかはれ世の中に

心やすくて住む人はなし

古澗寒泉湧き、青松雪後に凋む

當世の風俗

當世と云ふことは今に限らず三十年前は今の昔なり、今の昔は三十年
前の當世なり、今當世を嫌ふ人は、今の昔の風を好む人なり、若し嘗

世を偏に嫌はば、三十年前の當世をも嫌ふべし、三十年前にも昔あるべし、其昔にも又當世あるべし、然らば當世を捨て偏に昔をこのむ人、いつを昔と定むべきや、好むべき道嫌ふべき道は、昔に依るべからず、凡三十年には風俗少しは違ふ物とをばゆるなり、

富と仁

財寶に富める人は不仁の人なり、蓋し仁は博愛するの理なり、この理の字は義理道理にあらず本を云ふ、仁は本なり、博愛は端なり、已に博愛と云ふときは愛に外なし、粟あるときは即ち近くは鄰里郷黨に與ふ、廣く世を見るに救ふべき貧兒多し、財餘すべからず、若し餘ありと謂はば施さざるなり、施さずして家富むをばこれを仁と謂はず、陽虎曰く、富を爲せば仁ならず、仁をすれば富ますと云へり、

草荒れて人色を變ず、凡聖兩つながら齊く空す

富爵と仁義

彼は富、我は仁、彼は爵、我は義、君子固より君相に牢籠せらるゝ所たらず、人定て天に勝つ、志一なれば氣を動かす、君子亦造物の陶鑄を受けず、

富貴と泉石

富貴を浮雲にするの風あり、而して必ずしも岩棲穴處せず、泉石に膏肯するの癖なくして、而して常に自ら酒に酔ひ時に耽る、

一生

一休和尚

有漏路より無漏路へかへる一やすみ

雨降らば降れ風吹かば吹け

古松般若を談し、幽鳥眞如を弄す

和氣熱心

天地の氣、暖なれば生じ、寒なれば殺す、故に性氣清冷なる者は受事亦涼薄、唯和氣熱心の人、其福亦厚く、其の澤亦長し、

和氣と喜神

疾風怒雨は禽鳥も成々、霽日光風は草木も欣々、見るべし天地一日も和氣なかるべからず、人心一日も喜神なかるべからず

最上の文章

林間の松韻、石上の泉聲、靜裡聽來つて天地自然の鳴佩を識り、草際
の煙光、水心の雲影、間中觀去つて乾坤最上の文章を見る、

詩思と野興

詩思瀾陵橋上に係り、微吟就るとき林岫便ち己に浩然たり、野興鏡浦
曲邊に在り、獨往の時山川自ら相映發す、

理上に疎親を絶し、法中に彼此なし

胸中の空虚

胸中既に半點の物欲なし、雪爐焰に消ぬ氷日に消ゆるが如し、眼前自
ら一段の空明あり、時に月青天にあり影波に在るを覺ゆ、

濃艶と枯寂

念頭濃かなる者は、自ら待つ事厚し、亦人を待つも厚し、處々皆濃か
なり、念頭淡き者は、自ら待つこと薄し、人を待つも亦薄し、事々皆
淡し、故に君子居常嗜好、太だ濃艶なる可らず、亦太だ枯寂あるべか
らず、

情欲嗜好

一燈螢然、萬籟聲なし、此れ吾人初めて冥寂に入る時也、曉夢初めて醒めて群動未だ起らず、此れ吾人初めて混沌を出る處也、此に乗じて一念光りを廻はし、炯然反照せば、始めて耳目口鼻皆桎梏にして、情欲嗜好悉く機械たることを知らん、

月落ち潭に影なく、雲生して山に衣あり

喜 憂

子生れて母危く、蝨積つて盜窺ふ、何の喜か憂ひに非ざる、貧以て用を節すべく、病以て身を保つべし、何れ憂か喜びに非ざる、故に達人は、順逆一視して、欣々雨つながら忘る

憂動と澹泊

憂勤は是れ美德、太だ苦しめば、以て性に適ひ情を憚むなし、澹泊は是れ高風、太だ枯るれば、以て人を濟ひ物を利するなし、

大事と小事

小事を大事にせざれば、必らず大事に大事をしいたすべし、小事なれども仕損じて能きにはあらねども、小事なる故によし、それよとてやみぬ、大事に至り仕損じては實の大事なり、

好利者と好名者

利を好む者は道義の外に逸出し、其害顯はれて淺し、名を好む者は道義の中に竄入して、其害隠れて深し、

頭上の捲輪冠、脚下の無憂履

束 縛

白 川 樂 翁

飼鳥を樂しむは不仁の心なり、籠鳥の雲をしたとふは、世のたどへにもいふことなり、思ふに明暮かをまぬがれ出て、其心を心の儘に飛行せん事を思ふ外他事あるまじ、其心を推量り思ひやりなば、樂むべき事は、山野を心のまゝに飛行する諸鳥は、差支なき故に其音もいと艶しく愛すべし、籠の鳥は明暮をらとぶ鳥を羨み友をこひ、せめて心のまゝに羽つかふ事だにならず、人の立居に付ても、さこそ驚き心をつかふなるべし、かく苦しく悲しき心にて鳴く聲を聞いて、樂みとするはいかなる、不仁の心ぞや、飼鳥をして樂みとする人は、心もさこそつらからめど、うとましく覺ゆ侍る、たゞに殺したらむに長きくろしみなくて、却つてまされりどやいはん、兼好法師は花はさかりに、月は限なきをのみ見るものかは、雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行方しらぬも、猶おはれに情ふかしといへり、鶯も時鳥もまたか

りがねなんども、ふと思はず一こそ二聲音づれて、猶聞まほしと耳をかたぶくれど、いづ地へいにけん名殘多かるなごこそ、限りなくめでたくうれしけれ、明くれ眼の前にせば籠の中に押しめ置て、雲を懸ひ友をよぶ悲しき音を、耳かしましきまで聞いて己が樂とするは、心ありといはんや、かへすくかたましき心なり、庭なごも、あながちに作りみがけるは、自然の風景にあらすして、見ざめせらるゝ物なりおのづからなる木石の物ふりてをかしくたてるこそ、あかね風情はあなるなれ、作り木は、人にていは、皆不成人の如し、但少し枝をすかし葉を刈たぐひはよし、あながちに作りなしたるはあし、

毘耶城を打破して維摩詰を靠倒す

吉人と凶人

吉人は作用安詳を論ずるなく、即ち夢寐神魂も和氣にあらざるはなし、凶人は行事狼戾を論ずるなく、即ち聲音咲語も渾て是れ殺機、

燥性者と寡恩者

燥性の者に火熾、物は遇へば焚く、寡恩者は氷清、物に逢へば必ず殺す、凝滞固執の者は死水腐木の如し、生機己に絶え、功業を立て福社を延べ難し、

恩 義

箸とらば主人や親の恩を知れ

我が一力で喰ふと思ふな

施 恩

恩を施す者、内己を見ず、外人を見ず、即ち斗粟も萬鍾之恩に當るべし、物を利する者、己の施を計り、人の報を責めば、百鎰と雖も、一

文の功を成し難し、

佛祖の機を奪ひ、霖雨の手を借る

恩裡害を生ず

恩裡由来害を生ず、故に快意の時早く頭を回らすべし、敗後或は却て功を成す、故に心に拂る處、便ち手を放つこと勿れ、

恩怨俱泯

怨は徳に因て彰る、故に人をして我に徳せしむるには、徳怨の兩がら忘るに若かず、仇は恩に立つ、故に人をして恩を知らしむるには、恩仇の俱に泯るに若かず、

答に手間入れず

人に何事をも問はれて其答をするに、初めて思惟して問方の義に相合

ふやうに云ふへきと、思ふはあし、皆煩惱情識なり、只我心に打向ひて思ふやうに手間を入れずに答へたるは合ふものなり、もし合はずとも是非に及はず、情識なく思ふだけを云ふたるはよきなり、合せんとすれば、皆却て相合はざるなり、思ふだけをたま入れずに答へて、いやさては違ひぬと云ふときは、如何様にも情解すべし、

心は萬境に随つて轉ず、轉處實に能く幽なり

借金

澤

庵

知れる人に與へたる書

御手前萬事御才覺肝要に候、先書も天道次第どの御文尤に候、其分なる義も候へども、たゞ天道より金銀米穀を與へたる事はなく候、縦へば一石の米をかたはし食ひはて、其時天道より借銀借米有る間敷

候、何事も人間の業と御心得あるべく候、天道は此方次第のものにて候、世上申す天道は、杳に違ひ申候、古今に蓮の葉は丸く松の葉は細く候、其の如く我身に應ずる天道をよくわきまへ、少年の者は、引さかりて花麗をせず、大名は夫程に身を持つ所、則ち天道に任すると申候、百石取る身にて二百石とる人の体、天道に背き、身に不似合なる振舞をする人は、一生貧乏神の責物にて候、鶉の真似する鳥は、水に溺て死する、天道の罰にて候、鶉は鶉、鶉は鶉の働、天道の本理にて候、箇様なる謂を不知して天道と計り人毎にいふて寢て、いつも天道より彼に食を被與候様に思ふ事、大なる誤也、人は品々に世をわたる、天道にて候、然るに細工人も定規なくてはならざるものにて候、人は人を定規にするが能く候、但我心の様なる人を定規にせば、三五の十入にて候、分限を我と不申して、身を持つ分別能く摺切ぬ人と申す事

にて候、杓子定規如何、是は天道に御背き候間、つまり惡敷候、半分
 笑止候、我等申す事違ひ申すまじく候、冬は寒きものにて候、若しあ
 た、かなれば明年涼しからず、夏暑からざれば、秋萬事あしく候、物
 事に位の正しき處が天道にて候、大小ともに身の分限に應じて、十人
 抱て可然候得は、七八人心持後悔少く候、月を御覽可有候、十五夜は
 圓滿に候へば、一分つゝかけ申候、是れ人間の見せしめなり、

思へたゝ満つればやがて虧く月の

十六夜の空や人の世の中

此歌至極の理に候、長文のていむつかしく候へども、兄弟に生れあひ
 御爲よく候へかしと如此候、何とぞふうを御かへ候て、借金のみさや
 うに御分別專一に候、親類に遠ざかり、したしき知音に恨を結ぶも、
 多分貧故にて候、

心だに誠の道に叶ひなば

祈らすとても神や守らん

皆是れにて候、尙期後音之時候、恐惶、

達磨禪を會せず、夫子字を知らず

眼を閉て色を説く

生死即涅槃、煩惱即菩提、迷悟不二と、教ゆることは、本來空寂にし
 て生死なし、煩惱の實性即ち正覺なり、迷と思ふは、即ち悟なり、一
 切の作業は幻夢の如くにして、本来ないものと見れば一切に相を見
 ず、一切に相を見されは執着を離る、執着を斷んがために破相を示す
 なり、相を破りて後執を斷し了り、還り來て世間を見るときは、則ち
 破相すべきもなく斷執すべきもなし、然るを今の禪者、十分相に着し

執を持し、向上の人の行履上の言説を取て以て我有とす、天地懸隔せり、眼を閉ぢて色を説くか如し、

本來面目

春は花夏は、さず秋は月

冬雪冴えて冷しかりけり

青山自ら青山、白雲自ら白雲

無我の境

大きな躰をして小さき事に心配し、あげくの果に煩悶して居るものが、世の中に随分多いではないか、駄目だよ、彼等にはとても天下の大事は出来ない、物事を餘り大きく見るからいけないのだ、物事を自分の思慮の裡に曇みこむ事が出来ないから、あの通り心配した果が煩悶と

なつて、壽命も何ももらいめて仕舞うのだ、全体、自分が物事を呑み込まなければならぬのに、却つて物事の方から呑まれて仕舞ふから仕方がないよ、悟道徹底の極は、唯だ無我の二字に外ならずさ、幾ら禪で鍊り上げて、なか／＼さうはいかないよ、いざといふと、大抵のものが棄れて仕舞ふものだよ、

切りむすぶ太刀の下こそ地獄なれ

踏みこみ行けば後は極樂

とは昔し劔客の云つた事だ、歌の文句は、まづいけれども、無我の妙諦はつまり、この裡に潜んで居るのだ、

着眼

春風に我ことの葉のちりけるを

花の歌とや人の見るらん

卓見

病に遇うて後、強の資たるを思ひ、亂に處して後、平の福たるを思ふは、蚤智にあらざる也、福を俸うて、其禍の本たるを知り、生を貪つて、先づ其の死の因たるを知るは、それ卓見か、

白玉劔を按じて立つ、朱絃流水の聲

水の巻

學者の心

澤庵和尚

心こゝにあらざれば視れども見ぬ、聴けども聞ぬ、これ至れる人の心にあらず、學者の心なり、深く思へば、心こゝにありて視聽するときは、則ち一つのものにありて衆を欠く、心こゝにあらざして視聽する時は、則ち一つにあらずして衆を欠かず、

學者の心路

學者精神を收拾し、一路に併歸するを要す、如し徳を修めて意を事功名譽に留めば、必ず實詣なし、書を讀んで興を吟咏風雅に寄せば、定深心あらず、

學者の高慢

學問をして物を知り、人を目の下に見くだし、我身を高く吹上げて、つゝしみなきは、餌にひせびて死ぬる鳥に同じ、

學者と迂濶

勝海舟

人間の精根には限りがあるから、餘り多く讀書や學問に力を用ひると、勢ひ實務の方には疎くなる筈だ、學者必ずしも迂濶なものではない、その迂濶なのは力が及ばないからだ、

碧玉盤中の珠、瑠璃殿上の月

學者と道義

書を能く讀む人の道義なきは、只下戸の酒と云ふ字をかき文字を讀みもするが如し、酒といふ字は書けども酒徳に觸れざるなり、書は目に觸るゝこともなければ、道義のそなへある人は上戸なれども酒と云

ふ字知らざるが如し、酒の字知らねども酒徳にふれるなり、

臆病の大徳

雷の時は戸を細めて、線香の煙に風の運ぶは、臆病なれ共床しきこと也、里に狼の流行る時は、夜道を忌むべし、煤はらひには河豚汁の御用心、世に奢の調する時は、不實の人多く、人情を知らぬ者也、此時へらくたんど所持の人々は、随分油斷有るべからず、若き者の絹布には色里の氣さしあり、親仁の美服には必ず、山事の下心あるべし、進物の多ひ臺所は、惡嗅者也、竹に油を塗る人に、巾着の用心あるべし、我より目の下を行く者には、深切の繩をかけ、六道へ捨つべし、我より目の上を飛ぶ人には、空馬鹿の繩を張り、高間が原へ放つべし、聖賢の翅にもいらす、佛祖の綱にもかゝらずして、三夕の空に遊ぶべし、もしく今日の大雪跡へも先へも参り難し、簀子の端に只一夜たのみ

ますと有ければ娘立出、何ぞ風雅な御行脚かへ、心なき身にもあはれは知られけり嶋たつ澤の秋の夕暮、

葉を拂うて秋色を動かし、簾を捲て月花を分つ

阿房の先生

唐土にも老親仁、莊右衛門とて、阿房の先生有り、悲哉老の道天地自然の屈を出す、愚となり嫌り、物を忘る事を本意とす、嵯峨の邊りに芋掘て濫い、山茶を樂む野夫にひとし、是を號けて自然外道を笑ふ可し、莊右衛門莊右衛門、汝ち若者ながら道に志し有ること氣特也、大を以て小を論じ、理屈を出して乾坤に獨歩すと雖も、天地の一氣を握り、後世の註者も一氣風の如くに誤り、惜い哉是を失尼外道の見所として、正法の道には遠し、自然一氣は道の病にて、一つ穴の狐と知る

可し、此兩道は二乗の見と見る可し、翠瑟月花を樂に似て、生死を固むる根元也、其外烈仙童子の輕業網渡りは、筆を染るに逸なし、時に雲中より五百の仙童聲を揃へて、一の谷へ落來り、此方の先生を、自然一氣を握る外道と、寢語をぬかす阿房は何者しや、本名を名乗れいやいと、言れて一言も、ないはいのう、然れば佛家を二心と見た、熊谷共に、打どれやい、

自己

道元禪師

聞くまゝにまた心なき身にしあらば

おのれなりけり軒の玉水

佛滅二千年、比丘慚愧多し

自心

魔を降す者、先づ自心を降す、心伏すれば群魔退き聴く、横を馭する者、先づ其氣を馭す、平かなれば、外横侵さず。

自適

幽人清事、總て自適に在り、故に酒は勸めざるを以て歡と爲し、棋は争はざるを以て勝となし、笛は無腔を以て適と爲し、琴は無絃を以て高となし、會は期約せざるを以て眞率と爲し、客は送迎せざるを以て坦夷となし、若し一も文に牽れ、迹に泥まば、便ち塵世苦海に落ちん、

自得

只學んで知りたると、自得とは雪と墨のかはりあり、故に君子深く入るに道を以てす、その自得を得んと欲するなりと云へり、或武士の家人下部二三人聚りて云はく、いざ和殿原ひもじひに一睡せんとて皆寢

にけり、佛弟子の爲めに法度を定められたるを律と云ふ、律に云へり、食後晝時分に一睡せよとなり、僧は一粥一飯なり、一睡するは胸滿ちてひもしさを忘れさせんがためなり、我と身に覺へて知りたることは、佛も祖師も心相合ふものなり、此下部とも寢て胸のふくれひもしさを忘るゝことをよく自得せり、水のつめたいと云ふことを習ふて知ると云ふことはなきものぞ、口へ入るゝと自得するぞ、湯のあついなと云ふは如何やうなるものぞと習ふものはないぞ、口に入ると即ち自得するぞ、飢ると飽くと云ふことを習ふて知るものはないぞ、飢來れば即ち自得するぞ、飽來れば自ら知るぞ、諸道を知ること水の冷暖、食の飢飽の如くに自得すべし、

鳥は栖む無影の樹、花は開く不萌の枝

自得の士

寂を嗜む者は、白雲幽石を觀て空に通ず、榮に趨る者は、清歌妙舞を見て倦を忘る、唯自得の士、喧寂なく、榮枯なく、往として自適の天に非ざるはなし、

自分は留主

茶椀に清水を入れんと欲する者は、下地の惡水をこぼして入る時は濁らぬものなり、人は己れくの好む處を病と知るべし、是とするものを捨て、志を友とする時は、人有り、我よきと欲するものは、元來聞覺の見覺ぬたる事なり、是は己々の本心を昧ます狐なり、我慢も偏見も皆己を知らざる人の大切に思ふ事なり、我等が門にては簡様な金言にても久しく腹中に貯る時は穢息となるゆゑに、直に惡水と見て盈して捨る事なり、また當時富貴に屬して貧窮を敵とし、人の茶飯喰倒し

て、自分は留主をつかふ者を俳諧の罪人と云、灯心にて縫り出口の柳にさらすべし、

自他の過困

人の過誤は恕すべし、己に在つては恕すべからず、己の困辱は忍ぶべし、人に在つては忍ぶべからず、

障雲海上に横はり、劔を抜いて龍門を搦く

會得

庭の櫻に雀二つとまゐる、上なる雀しやくしやくと啼きぬれば、下なる雀ちくと云ふて飛退さぬ、その跡へ上なる雀をり居て蜘蛛を取りて食ふ、上よりしやくしやくと鳴きたるとして、下なる雀の痛みにも成るべしとも覺へざれど、彼其旨を得て退さぬ、心を付けてみればかれ風情にも道

あることを知れり、智者の教化に随ふものは智者と心の通ずる故なり、その機にあたらざるものを強めてせむるとも心は通せず、道は彼同じ心ありかたきものと見ゆる、佛法の教化もその機にしたこと詮なるべし、雀の心を會するか故に彼其心に随ふ、犬は犬の心を會する故に彼其の心に随ふ、其道に入らざる者を我心にあはせてせむるは拙し、

會得と破機

個中の趣を會し得れば、五湖の煙月盡く寸裡に入る、眼前の機を破り得れば、千古の英雄盡く常握に歸す、

會景遠さに非ず

趣を得るは多に在らず、盆池拳石の間に煙霞具足す、會景遠に在らず、蓬窓竹屋の下、風月自ら賒なり、

鯨海水を呑盡して、珊瑚の枝を露出す

根蒂手に在り

人生原是れ一傀儡、只根蒂の手に在るを要す、一線亂れず、卷舒自由、行止我に在り、一毫も他人の提掇を受けず、便ち此の場中を超出す、

奢者と能者

奢る者は富んで足らず、何ぞ儉者の貧にして餘有るに如ん、能者は勞して怨を府む、何ぞ拙者の逸して眞を全ふするに如ん、

放逸と豪横

大人は畏れざるべからず、大人を畏れば放逸の心なし、小民も亦畏れざるべからず、小民を畏れば豪横の名なし、

受冥發昭

肝病を受くれば、目視ること能はず、腎病を受くれば耳聴くこと能はず、病は人の見ざる所に受て、必人の共に見る所に發す、故に君子罪を昭々に得ることなきを欲せば、先づ罪を冥々に得ることなかれ、

石に座すれば雲衲に生じ、泉を添ふれば月瓶に入る

閑居して不善

小人閑居して不善をなすとあれども、小人ならずとも閑居して不善をなすもの少からず、されば獨居の閑を樂むことはいとかたし、大かたは據なく隠居する輩世間に多し、自得して世塵をさけ、思棄て、身を遁る、者は格別にして、隠居しながら物を貪り世話に執着するは、隠居に似て隠居にあらず、近世は隱宅に標札多かるにても知られたり、

表裏の盜

垣を破り、藏の尻を切るばかりが盜にはあらず、道理に叶はざるものを着、道理に叶はざるものを食ふもの皆盜なり、出家として道心なくしてよき物を着、よきものを食ふ、これ盜人の長吏なり、臣として君に忠節を存せずして肩に着、口に食ふものは皆主君のものなり、これ亦盜人に似たり、數年養はれて一度君の用に立つべき身を、行ひの義なく、無養生して終に一度の用にもた、す身を果さば、數年の給はる所の所領皆盜賊に同じかるべきなり、主親を持ちたらん人は、我身を我身とも思はず、主親の身と思ふべし、主親の身と思は、何ぞ我儘にして身を毀ひ、一度の用にた、すして大事の身を捨つべけんや、數年の恩賞を一度報せんと思は、食ひたきものは多く食ふべからず、飲みたきものも過すべからず、有りたきまゝに身を持つ可らず、身全からずば、如何にかして望みは達すべき、其望なくして徒らに恩賞を

受けて其祿を食ふは、盗人に異なるべからず、人たるもの之に耻ぢざらんや、

知音纒かに耳を側れば、項羽江頭を過ぐ

盗に糧を齎す

心地乾坤、方に書を読み古を學ぶべし、然らざれば一の善行を見ては、竊て以て私を濟し、一の善言を聞ては、假て以て短を覆ふ、是れ又唇に兵を藉し、而して盗に糧を齎すなり、

賊の便化

耳目見聞は外賊となり、情慾意識は内賊となる、只是れ主人翁、慍々不昧にして中堂に獨座せば、賊便化して家人となる、

恐るゝ勿れ

何事もおづるなく、わづれば仕損ふぞ、おづる平生のこと、場へいではおづるおづるなく、溝をばづんと飛べ、危しと思へば、はまると、

精神百倍

日既に暮れて、猶煙霞絢爛、歳將に晚んとす、更に橙橘芳馨、故に末路晩年、君子更に精神百倍なるへし、

水を汲みては山の動くかと疑ひ、帆は舉げては岸の行くかと覺う

追取の氣

奉公の人の心掛にも品あり、人退けば退き、人進めば進む、此等の人立身すべからず、人退くにも退かず、人進めば我いよくすむ、此人立身すへし、人進めば共に進み、人退けばともに退く、功少し、人

進まば我いよく心を捨てず、人の退くときを待ちて進む功多し、斷る處を心にかくる人能き奉公の意なり、蹴鞠の人つめを詮に心掛ると見えたり、

捲土重來

伏すこと久しきものは、飛ぶこと必ず高し、開くこと先つものは、謝すること獨り早し、此を知らば、以て階登の憂を免るべく、以て躁急の念を消すべし、

立身の歩足

身を立つるに一步を高うして立たざれば、塵裡衣を振ひ泥中足を濯ぶが如し、如何か超達せん、世に處るに一步を退いて處らざれば、飛蛾の燭に投し羶羊の藩に觸るゝが如し、如何の安樂あらん、

多藏と高歩

多く藏る者厚く亡ふ、故に富は貧の慮なきに如かざるを知る、高く歩む者は疾く顛る、故に貴は賤の常安に如かざるを知る、

牛の飲む水は乳となり、蛇の飲む水は毒となる

一部の眞鼓吹

人心一部の眞文章あり、都て殘編斷簡に封緘し了らしむ、一部の眞鼓吹あり、都て妖歌艶舞に湮没し了らしむ、學者須らく外物を掃除し、直に本來を覓むべし、纔に個の新受用、

愆尤駢集

十語九中るも、未だ必ずしも奇と稱せず、一語中らざれば、愆尤駢集る、十謀九成るも、未だ必ずしも功に歸せず、一謀成らざれば、訾議叢り興る、君子寧ろ黙して躁なることなく、寧ろ拙にして巧なるなり、

所以、

歸一

雨あられ雪や氷とへだつれど

落つればおなじ谷川の水

清風明月を拂ひ、明月清風を拂ふ

主一無適

馱馬に乗りて道ゆく人、油断して落ちなば重くば當座にも死すべし、
足を折り手を折りて不具にもなるべし、或は五年三年後まで悩むこと
世に多し、慮りなきときは則ち憂ありとはかゝることなり、朝に宿を
出で午時に下りまた乗り、夕に宿に着き下る、なれば半日づゝの氣遣
ひなり、半日の間を氣遣ひなく樂まんとして當座に死し若し不具にもな

り、五年三年の苦みをせんは却て損なり、これを思は、乗りてより下
る、迄は馬の外に心をやるべからず、敬の一字にもわたるべし、主一
無適を思ふべし、

一色

察 禪 師

枯木巖前差路多し、行人此に到つて盡く踉蹌す、鷺鷥雪に立つて同色
に非ず、明月蘆花他に似ず、了了の時了すべきなし、玄玄の處亦
須らく呵すべし、慇懃爲に唱ふ玄中の曲、空裏の蟾光撮る事を得てん
や、

一段の好色

春至り時和けば、花も尚ほ一段の好色を鋪き、鳥且く幾句の好音を囀
す、士君子幸に頭角を列し復温飽に遇ふ、好言を立て好事を行ふと思
はざれば、是れ世にあること百年と雖も、恰も一日を生ざるに似たり、

林下十年の夢、湖邊一笑新なり

樓上の一睡

今川義元の詩に曰く、人生五十夢まぼろしの如しと、善哉、我一日大
鼻蟲々乎と打鳴し、貪眠の折しも、夢に天地を丸呑にして、座を虚空
に占め、説て衆生に向て、法華經第二卷方便品を解し、其結尾の十如
是を演し來り、一心敬禮天帝に向て、一拜將に座を下らんとする時、
空中忽ち黄金の蓮華を産出し、其上に菩薩摩訶薩等の諸佛あらはれ、
皆異御同音に賛偈めの玉はく、噫、出世の如來、能く天上界衆生を救
化し玉へりと、我天狗然と、鼻を高らかにし、一步を退き出世へ下ら
んとするとき、夢忽焉として、醒め、己れば樓上に臥し居、猶孔明臥
龍の晝寢かと疑はれたり、依て此理を推考せば、又佛真味即萬物是空

清静寂滅、

媚悦と包容

寧ろ小人に忌み毀はるゝも、小人に媚悦はるゝこと勿れ、寧ろ君子に
責め修めらるゝも、君子に包容せらるゝ勿れ、

近いて染まらず

勢利粉華に近かざるものを潔と爲す、之に近づいて染まざるものを尤
潔となす、智械機巧を知らざるものを高となす、之を知つて用ゐざる
ものを尤高となす

夜静かにして溪聲近く、庭寒うして月色深し

橋と端

橋をばわたれ、端をわたるなど云ふは面白き奇語なり、何事のふしな

まことをも、ふしありさうに云ひなせば、その言葉を興してよく口懐
 るによりて、はしどだに云へば此言葉を思ひ出し云ひ出して利あり、
 上のはしは橋なり、下のはしは端なり、橋を渡るに橋の中正をわたれ
 ど云へることなり、橋と端とは唱へかはりぬれど、此にてまぎらかし
 て同じ唱へに云ふてよし、鳥は食へ、とりは食ひそと、俗語に云へる
 も同じ、鳥の脊骨の下に付きて血あり、之をとりと名けるとなり、如
 何なる仔細や、鳥とは云ふならん、この血毒にて人にたゝると云へ
 り、これ毒ぞと人に教へても人胸に留めず、鳥は食へとりな食ひそと
 綺語に云へば、この詞を興して人このことを思ひ出して利あり、覺へ
 がたきことを歌括にすれば、よく覺ゆるがごとし、

珍と興

席に座したるより、竹倚曲藤等に腰掛けたるは樂しといはゞ、腰掛け

たるより座したるは樂しからぬことなり、如何にして斯くあるがとな
 れば、座するは常なり、腰掛くる時の興なれば、稀なることを以て興
 する心なり、心は珍らしきことに興する也、

宇宙双日なく、乾坤只一人

時計と鶏

ある人、時刻を知らん爲にとて時計を求めんとするを、その妻之をど
 いめていひけるは、明暮にかくる世話のみにあらず、くるひたる折か
 らには、その隙を費し、時計の爲に却つて時計を失ふこと多からん、
 やめたまへといへば、さあならば鶏を飼ふべしといふに、その妻またどい
 めていひけるは、時刻は人のうへにあり、潮の満干もこれと同じかる
 べし、時計鶏をたよりとするは、勤めに怠るものゝいたすことなりと、

夫を諫めて鶏をも飼はずなりしと、

化け方の巧拙

世の中に化け方の最も上手なるものは、最も能く世間の信用を受く、而かも人生五十年、此の「化け」の顯はれずして死するものは、亦最も世の幸福なるものなりとす、

世の中はきつねたぬきの化け競べ

尾の出ぬさきに穴に入るなり

愚者と財

愚者は不用の財を貪るに勞し、賢者は用の財をつくるに樂む、不用の財は限りなし、用の財は限りあり、限りある身を以て、限りなき財を求めは、死に至るまで、貪慾盡ることなし、されば身を勞して財をあつむる時はその身終れり、用の財は用の足ることを樂むが故に、毒を

養ふ財に不用といふことあるべからずとおもふものあれども、日用の外を散する財はみな不用の財なり、

頭上一堆の塵、脚下三尺の土

有のまゝ

麤面なる人を初めて見たるときは、さて見苦しの人物やと思へども、慣れて毎日見れば後は見よきものなり、これ血氣誤られて此のことゝ、最初の一念は本心に感ずる故に其もの好し悪しをありの儘に知るなり、されば人の好悪はよく見ゆるものなり、我好悪をは知らぬものなり、我所作は我身になれて知られぬものなり、又悪きと知り、狂げて悪をするは道の外なり、

食 籍

飯緑食籍聊茶湯、竹は菊籬を縛つて梅塙を補ふ、人間世諦盡く餓死、地獄遠く離れて安樂長し、

釣水と奕棋

水に釣るは逸事也、尙生殺の柄を持す、奕棋は清戯也、且つ戦争の心を動かす、見るべし事を喜むは、事を省くの適たるに如かず、多能は無能は無能の眞を全ふするに若かず

優人と奕者

優人粉を傳ひ硃を調へ、妍醜を毫端に效すも、俄にして歌残り場罷れば、妍醜何ぞ存せん、奕者先を争ひ後を競ふ、雌雄を着子に較ぶも、俄にして局盡き子収むれば雌雄安くにか在る、

萬人一塚となる、時の人悉く悲みを帯ぶ

木之卷

氣度風雅

貧家淨く地を拂ひ、貧女淨く頭を梳れば、景色艶麗あらずと雖も、氣度自ら是れ風雅、士君子一たび窮愁寥落に當つて、奈何を輒ち自ら廢弛せんや、

還源の要道

大靜 禪師

毎に夜座するに當つて心念紛飛す、但だ紛飛の心を將て、以て紛飛の處を究めよ、之を究むるに處なくんば、紛飛の念何ぞ存せん、返つて心を究め究むれば、能究の心も安くにかある、能照の智本空にして、所縁の境も亦寂なり、寂にして非寂なることは、蓋し能寂の人なければなり、照にして非照なることは、蓋し能照の境なければなり、境智

俱に泯ふして心念宛然たり、外知を尋ねず、内に定に住まず、二途俱に泯うして一性怡然たらん、此れ乃ち還源の要道也、

進徳修行の砥石

耳中常に耳に逆ふの言を聞き、心中常に心に拂ふの事あれば、纔かに是れ徳を進め行を修む的の砥石、若し言々耳に悦び、事々心に快ければ、便ち此生を把て、鳩毒中に埋没す

水は荷花を帯びて白く、烟は楊柳に和して青し

道徳と功業

富貴名譽、道徳より來るものは、山中の花の如し、自らは是れ舒徐繁衍、功業より來るものは、盆檻中の花の如し、便ち遷徙廢興あり、若し權力を以て得る者は、瓶鉢中の花の如し、其根植ぬざれば、其の萎むこと

と立つて待つべし、

風濤と化育

心地上、風濤なければ、在るに隨ふて皆青山綠樹、性天中化育あれば、處に觸れて魚躍り鳶飛ぶを見る、

君子の大量

地の穢たるもの多く物を生ず、水の清めるもの常に魚なし、故に君子垢を含み汚を納るの量を存すべし、潔を好み獨行の操を持すべからず、

寛厚と忌刻

念頭の寛厚なるは、春風の煦育の如く、萬物之に遭うて生ず、念頭の忌刻なるは、朔雪陰凝の如く、萬物之に遇うて死す、

鸚鵡煎茶と叫ぶ、茶を與ふれども元識らず

有道的心體

動を好む者は、雲電風燈、寂を嗜む者は、死灰稿木、定雲止水の中、
鳶飛んで魚躍るの氣象あるべし、纔に是れ有道的心體、

歛束清苦

學者段の競業的の心思あり、又段の瀟洒的趣味あり、若し一味歛束清
苦ならば、是秋殺あつて春生なし、何を以て萬物を發育せん、

儉讓

儉は美德也、過ぐれば慳吝となり、反て雅道を傷る、讓は懿行也、過
ぐれば足恭となり、曲謹となり、多くは機心を出す

道を讓る

桶を荷ふもの南に向ひ行く、兩人屢々その先を辞す、一人曰く、吾桶
甚だ輕し予先づ行くべし、此に於て此語をさして已に進む、兩人の心
黔首なりと雖も、仁あり、義あり、禮あり、輕さを荷ふ者まづ進むと
きは、則ち歩速にしてその從ふもの苦む、重を荷ふものまづ進むとさ
は、則ちその量に應じて遲速我にあり、故に輕さをになふ者、重をに
なふもの、勞を知る、仁此に在り、兩人屢辭す、禮此に在り、終に重
を荷ふもの先に進む、義此にあり、士民すら猶此の如し、況や上の人
に於てを乎、

三尺の劔を磨礪して、不平の人を斬らんと欲す

第一個の境界

田父野叟、語るに黃鷄白酒を以てすれば、欣然として喜ぶ、向ふに鼎

養を以てすれば、知らず、語るに温袍襦褌を以てすれば、油然として
 樂む、向ふに袈裟を以てすれば識らず、其天全し、故に其欲淡し、此
 は是れ人生第一個の境界、

完に處らず

欵器は滿を以て覆へり、椀滿は空を以て全し、故に君子寧ろ無に居て
 有に居らず、寧ろ欵に處で、完に處らず、

度胸

氷川翁

白隠といふ一の禪僧があつた、此和尚の寺の門前に、一軒の豆腐屋が
 あつた、其内の娘が不圖妊娠した、兩親は痛く驚き詰責すると、娘は
 實はお寺の上人さんと云々して、妊娠だと白状した、そこで兩親も大
 に喜び、御上人様のお胤であるなりとて産落させ、大切に育て上げた
 二三年たつと彼の娘が、實にすまないと考へ付て實を吐いた、そこで

その子供が、白隠の胤でないといふ事が分つた、故に兩親も大に驚き、
 直に寺に至り白隠に向ひ、前後の始末を話し、大にあやまる、すると、
 白隠はハアソーカと一言いつたばかりであつた、ハアソーカの一言、
 中々大きなものにて、天下の事、凡そ春風の面を拂つて去る如き心胸
 此の度胸あつて、始めて天下の大局に當ることが出来る、

證譚の月を踏破し、碧落の天を穿開す

獨を慎む

兎に角に何事も遮はり覆はれぬものに決定せば、人は私曲の耻はある
 まじきものなり、唯藏せば藏さるゝものと思ふ故に顯はれて耻を受く、
 能く藏されぬ物なればこそ、盗人は己に顯はるれば身を亡ぼすにきは
 まりぬ、何程の才覺をいだして力め藏さんとするども、古今盗人の顯

はれざるはなし況や亦其餘事をや、身を亡ぼし命を失ふことは盜程には人思ふべからず、然らば盜の外のこと又何ぞ人之を知らざらん乎、故に雲かゝる峰に獨り居るとも、君子は行跡を亂すことあるべからず、實に君子は獨りを慎むなり、我心を謂ふ、我行ひ亂るゝとせば、則ち人未だ知らずと雖も、我心まづこれを知る、況や人の知るをや、心の形に顯はるゝ紅よりも甚だし、

獨を戒む

人の小過を責めず、人の陰私を發かず、人の舊惡を念はず、三の者以て徳を養ふべく、亦以て害に遠かるべし、

扶ては斷橋の水を渡り、伴うては無月の村に歸る

以我轉物

我を以て物を轉するものは、得も固喜はず、失亦憂へず、大地盡く逍遙に屬す、物を以て我を役する者は、逆固憎生じ、順亦愛を生じ、一毛便ち纏縛を生ず、

隱士

白樂天

大隱は朝市にまじはり、小隱は深山に入る、深山もすさまじ、朝市もさはがし、我は中隱を造らん、

至人は皆靜

道の至極は皆靜なり、中庸に合ふ、中に過くるもの氣の馳るなりと、性理大全に見へたり、氣の走るは皆勿忙の故なり、至人は皆靜なり、一より二三を超へ、四にはしるはこれ中を過ぎて皆大過なり、

山居の胸次

山居胸次、清酒物に觸れて皆佳思あり、孤雲野鶴を見て超絶の想を起

し、石澗流泉に遇うて深雪の思を動かし、老梅寒梅を撫して勁節挺立し、沙鶴麋鹿を侶として機心頓に忘る、若し一たび走つて塵寰に入ては、物相開からざるに論なし、即此身贅旒に屬す、

曲終へて人見えす、江上數峰青し

雲水の趣味

徳に進み道を修むるに、個の木石的の念頭、若し一たび欣羨あれば、便ち欲境に趨る、世を濟ひ邦を経るに、段の雲水の趣味を要す、若し一たび貧着あれば、便ち危機に墮ちん、

香巖擊竹

畫に對して忽然色情を盡し、道人龜鑑太た分明、娘生佛南陽の境を見る、腸斷黃陵夜雨の聲、

茗幕を携へ來つて風塵を動かし、看々聞々悟道新たなり、半夜千竿修竹の雨、南陽塔下精神を弄す、

久しく響く香巖一擊の聲、憐むべし悟道佳名を發するを、蕭々耳に逆ふ竹扉の雨、滴り盡す南陽塔下の情、

棲守と依阿

道徳に棲守する者は一時に寂寞に、權勢に依阿するものは萬古に淒涼なり、達人は物外の物を觀、身後の身を思ふ、寧ろ一時の寂寞を受くとも、萬古の淒涼を取ることも母れ、

白雲語なし

興時を透うて來れば、芳草中履を撒して間行し、野鳥機を忘れて時に伴となる、景心と會すれば、落花の下襟を披て兀座し、白雲語なく澁に相留む、

風南岸の柳を吹き、雨は北池の蓮を打つ

喜寂厭喧

寂を喜び喧を厭ふ者、往々人を避け以て静を求む、意人なきにあつて便ち我相を爲すを知らず、心静に着せば、便ち是れ動根、如何ぞ人我一視、動静兩忘的の境界に到り得ん、

跡を藏すに如す

今の世に順はんとすれば道に背く、道に背くまじとすれば世に順はず、只跡を藏さんには如かざるなり、

空寂と靈和

圭峰禪師

空寂を以て自身として、色身を認ること勿れ、靈和を以て自身として、妄想の念を認むること勿れ、此則ち朝暮止觀修行用心也

あやまりに影を我ふと思ひなして

まことの心わすれてしかな

くもりなき心のつさはむかしより

まちをしむべき山のはもなし

幽鳥語喃々、雲を辭して亂峰に入る

去影存心

理寂なれば事寂、事を遣て理を執る者は、影を去つて形を留むるに似たり、心空なれば境空し、境を去つて心を存する者は、麤を聚て蚘を却くるが如し、

萬念灰冷

試に未だ生れざるの前、何の象貌ありしかを思ひ、又既に死するの後、

何の景色を作すかを思はれ、萬念灰冷、一性寂然、自ら物外に超ぬ象先に遊ぶべし。

萬有皆閑か也

我終に寂しきことを知らず、問ひ來る人の歸ればあら閑かなり面白やと思ひ、日暮れば今は早問ふ人もあらじ、我身になりたりあら閑かやと思ふ、雨も月も閑かなれば、我雨我月よと思はるゝなり、然りとて此閑を樂んでかく閑居するにはあらす、少し心による所ありてかく閑居せり、若し閑を樂んで山居を好まば、世人の富貴を好むに同じ、夢の辛みを食む蟲あり、甘草の甘さを好む蟲あり、辛さと甘さとは其身にあり、樂む所は同じ、富貴閑熱と閑居寂寞とは變はれども、樂む所は同じ、然れば道を捨て樂みを取るは快樂の人に同じかるべし、富貴を好んで人に諂ひ、佛法を賣りて渡世の營みをし、佛祖の道を泥土に墜さ

んよりはと思ひて、樹下石上の栖居せん人は、樂みを求め山に入るにはあらじ。

秦樓夜月に歌ひ、魏闕春風に醉ふ

萬籟寂寥の時

萬籟寂寥中、忽ち一鳥の弄聲を聞けば、便ち許多の幽趣を喚起す、萬卉摧剝の後、忽ち一枝の擢秀を見れば、便ち無限の生機を觸れ動かす、見るべし性天未だ常に枯稿せず、機神最も觸發すべし。

幽 邃

芭

蕉

古池や蛙飛込む水の音

寂 寥

ひとりすむ宿こそ月はさびしけれ

かならず山の奥ならねども

大空

世の中にまことの人やなかるらん

かぎりも見えぬ大空の色

袖中に日月を藏し、掌内に乾坤を握る

静夜の鐘聲

静夜の鐘聲を聴て、夢中の夢を喚醒す、澄潭の月影を見て、身外の身を窺見る。

落花の後

樹木根に歸するに至つて後、花萼枝葉の徒榮を知り、人事棺を蓋ふに至つて後、子女玉帛の益なきを知る。

雨餘と半夜

雨餘山色を觀、景色便ち新妍を覺ゆ、夜靜かに鐘聲を聴く、音響尤も清越をなす、

名月

鼎 軒

小便の音もすみ田の月夜かな

終日紅塵に走つて、自家の珍を失却す

今日

山深み峰にも尾にも聲たてゝ

けふもくれぬと日ぐらしが啼く

明日

あすありと思ふ心の仇ぞくら

夜半にあらしの吹かぬものは

光陰消過

門松は冥途の旅の一里塚

馬士が子もなくとまりやもなし

時花早逸

源 頼 政

庭の面のさくらはなかは過ぎにけり

やよひの空はなかはならぬに

白鷺沙汀に立ち、蘆花相對して開く

影外の影

山河大地已に微塵に屬す、而して況んや塵中の塵、血肉身軀且つ泡影に歸す、而して影外の影、上々智に非ざれば、了々心なし

間靜明暗

間中放過せざれば、忙處に受用あり、靜中落空せざれば、動處に受用あり、暗中欺隱せざれば、明處に受用あり、

間 忙

人生太だ間なれば、別念竊に生ず、太だ忙なれば、眞性現れず、故に士君子身心の憂を抱かざるべからず、亦風月の趣に耽らざるべからず、

歸 夢

芭 蕉

夏草やつはものどもの夢の跡

臂長うして衫袖短かく、脚瘦せて草鞋寛し

遂に夢

永 覺 禪 師

虚空世界も一の夢場也、三乘四教も一の夢法也、諸佛衆生も一の夢中の人也、夢中の人、夢場に據つて夢法を説く、又安んず其の夢を夢とせざるを保せんや、故に夢中にして其の夢みずといふ者あり、正に大なる夢なる者なり、夢中にして其の夢たるを知る者あり、夢中にして夢を出でんと求むるものあり、均しく之れ夢を離れざる者なり忽然として夢を破つて出づるときは、夢場と、夢法と、夢中の人と一切消殞せん。

極端の同居

柳澤 淇園

夫婦の中のしたみも、禮あるうちはめづらかにして、その情至つて深く又厚し、禮を失ふ時は情自然と薄くして遠きにわらず、仁義遜讓は禮を厚うするの媒にして、この禮媚諂と脊を合す、智は痴とさし向ひ、誠は虚言と隣る、さあれば心安だてと愛想づかしは、いつも同居と知

べきなり、

禪教の立機

一字識らずして詩意ある者は、詩家の真趣を得、一偈參せずして禪味あるもの、禪教の立機を悟る、

牡丹一日の紅、滿城の公子醉ふ

幻境と眞悟

鶯花茂くして、山濃かに谷艶なる、総て是れ乾坤の幻境、水木落て石瘦せ甍枯る、纔に天地の眞吾を見る、

方圓寛嚴

治世に處めば、方なるべく、亂世に處めば圓なるべく、叔季の世に處めば、方圓並び用ゐらるべく、善人を待つは寛なるべく、悪人を待つ

は、賤なるべく、庸衆の人を待つは、寛嚴共に存すべし、

立機

察 禪 師

迢々たる空劫能く収むること勿れ、豈に塵機の爲に繫留せらるゝことをなさんや、妙體本來處所なし、通身何ぞ更に蹤由あらん、靈然たる一句群象を超ふ、迥かに三乗を出で、は修を假らず、手を那邊千里の外に撒す、廻程火中の牛となるに堪へたり

機 會

喜びに乗じて諾を軽くすべからず、酔に因て噴を生ずべからず、快に乗じて事を多くすべからず、倦に因て鮮終すべからず、

誰か知る砧杵の裏、此の斷腸の人あるを

空裡の華

夫婦は二世にあらずんば誠を語らず、醫は三世にあらずんば理屈を出はずと云ふ事は、何と云ふ事や、岐童が所謂大方四ツあり、猫の疝氣には天木蓼、犬に薄荷、鳥に番椒、梅に鶯などゝて、色々に備りし藥ありしに、その中に櫻は雲と云浮名たちけり、櫻華、皆はその天年を経て道に到るの端なり、何のころよりか、人は陰陽の兩儀より五行の名をよび出し、素難の論かならぬとて、細見道行本までたくばへ、千八百餘種の青物にて、中々足りる事にもあらず、十二經水にいたつては、賀茂川、玉川あり、二十四脈の外に曾我の病あり、西明寺雪の段に、委しき先生の藥のさかぬと云事は、理屈の穴へ腰打かけて、扱もちかけて、古人に化されるかゆるゑなり、然れば學問の理屈をいはなれて、高く乾坤の外に遊ぶ事なりと心得たる先生が、せんたく婆々の歴詠め、鎌倉袖が浦へ落、疝氣となる人も有る故に、本來先天の地もい

で、金剛無爲真人の都に到る時は、八風の虚邪の來る方もなく、北風の屁の行衛もしらず、真人無爲虚無の妙理にもいたり、船乘の入り、糊うり婆々の摺子木の音に、翌の日和も樂々と知れる事なり、八百屋の娘と聞いて戀の病とさすは、空裡に華を見るが如し、御醫者とまでも坊さまでも、附た理屈にめげはせぬ、

馬を西門の柳に繋いで、去夏の蟬を聞くを思ふ

彫謝と眞如

髮落ち齒疏にして、幻形の彫謝に任せ、鳥吟と花咲ひ、自性の眞如を識る、

潔と汚

糞虫は至穢、變じて蟬となり、露を秋風に飲む、腐草光りなし、化し

て螢となり、采を夏月に輝かす、固に知る潔は常に汚より出で、明は毎に晦より生ず、

美婦醜心

美人雲雨愛河深し、樓子老禪樓上の吟、我に抱持喫吻の興あり、竟に火聚捨身の心なし、

姪邪の淵藪

淫奔の婦は矯て尼となり、熱中の人は激して道に入る、清淨の門常に淫邪の淵藪となる、

路遙かにして馬力を知り、歳久うして人心を識る

金之卷

天の機織

天の機織は不測、抑へて伸べ、伸して抑ふ、皆是れ英雄を播弄し、彗
 傑を顛倒する處、君子只是れ逆に来るを順に受け、安に居て危を思は
 ず、天亦其伎倆を用ふる所なけん、

天機を樂む

魚は水を得て、逝て水に相忘る、鳥は風に乘じて、飛んで風あるを知
 らず、此を識らば、以て物累を超ゆべく、以て天機を樂むべし、

天機に一任

繩鋸木斷水滴石穿、道を學ぶ者須らく力素を加ふべし、水到つて渠成
 り、爪熟して蒂落つ、道を得る者、天機に一任す、

天理路と人欲路

天理路上甚だ寛し、稍心を遊せば、胸中便ち宏大宏朗なるを覺ゆ、人
 欲路上甚だ窄し、纔に迹を寄すれば、眼前俱に是れ荆棘泥塗、

七星光り燦爛、萬里烟塵を絶す

天理と無心

物各天理あり、其天理に従ふ時は、則ちもの我心の如く従ふ、其理に
 逆ふ時は、則ちもの我に従はず、况んや有情に於てをや、車は横にを
 すべからず、もし横におす時は行かず、これ車の理に逆ふ故なり、車
 は造化の形にあらず人の造作なり、人之を造ると雖も、既に形成ると
 きは則ち天理あり、天理に従ふ時は、則ち無心にして従ふものなり、

天命

澤庵和尚

天命は一盞の燈油の如し、誰も見て誰も知らず、人の身は器なり、油を受ける盞の如し、油盡くれば火滅す、油は天命の如し、天命盡くる時は人死す、

性天と天機

人情驚啼を聞かば則ち喜び、蛙鳴を聞けば則ち厭ふ、花を見れば之を培んことを思ひ、草に遇へば之を去らんと欲す、但し是れ形氣を以て事を用ふ、若し性天を以て之を視れば、何者か自ら其天機を鳴らすに非ざらん、自ら其生意を暢ふるに非ざらん、

野火焼げとも盡さず、春風吹いて又生す

眞境眞機

人心多くは動處より眞を失ふ、若し一念生せず、澄然靜坐すれば、雲

興つて悠然共に逝き、雨滴つて冷然俱に清く、鳥啼て欣然會することあり、花落ちて瀟然自得す、何の地か眞境に非ざらん、何の物か眞機なからん、

興亡と安危

昔百丈大智禪師、叢林を立て、規矩を立て、像季不正の弊を救はんと欲し、曾て像季學者の規矩を盗み、以て百丈の叢林を破るを知らず、上古の世、巢居穴處すと雖も、人々自ら律す、大智の後、高堂廣厦と雖も、人々自ら廢す、故に曰く安危は徳也、興亡は數也、苟も徳の將うべきもの、何ぞ必ずしも叢林のみならんや、苟も數の憑るべきあらば、曷ぞ規矩を用ひん、

迹用と神用

人有字の書を読むことを解して、無字の書を読むことを解せず、有絃

の琴を弾することを知つて、無絃の琴を弾することを知らず、迹用を以てして神用を以てせず、何を以て琴書の趣を得ん、

若し琴中の趣きを識らば、何ぞ絃上の聲を勞せん

神味

神酣なれば、布被窩中に天地中和の氣を得、味足れば、藜羹飯後人生澹泊の眞を知る、

教理

波も引き風もつながぬ捨小舟

月こそ夜半のさかりなりけれ

浴油

沙門無住

達磨は油を煎じて身にあび、兜率の僧都は生盲にならんことをねがひ、

大方唐土我朝にも昔しよと今に至るまで、かやうの人々多しそれはことばり也、命をあしたの露にたとふれば、露はなほ時をさだめたり、身を夕の霜にくらぶれば、霜又夜のあくる程あり、かたく愚かなる世の中なれば、かしく思ひよる人々は、躰をかへ、形をやつし玉ふなり、

水を掬すれば月手にあり、花を弄すれば香衣に満つ

心主

盲人あり物を荷ふて津に入る、津北に在り、北に向ひて行く、南より多く人馬競ひきたる、盲人耳をそばだて、聞きてこれを辨ふ、行くにわいてその難なし、然るときは則ち耳を以て目の用を足す、予此に於てこれを思ふ、盲人は耳をもつて目とし、聾人は目を以て耳とするもの

なり、もし六根の名ひとりして其の事を辨せば、盲人は何として向ふものを辨せん乎、盲人といへども言を以てする時は則ち色を辨し、聾人といへども筆を以てするときは則ち聲を辨す、何によつて此の如くなるや、心主ある故なり、六根ありと雖も心なければ何ぞ此の如くらん乎、故に心を失ふものは狂亂す、目明かにして見ぬざるが如し、耳聰して聞かざる如きなり、一心は是身の一主君なり、六根は是六臣なり、臣は君に奉ずるに外事を以てす、君は臣に勅するに内證を以てす、君を失ふときは則ち臣々たらず、故に六根ありと雖も死人は物を辨へざるなり、

心界

高に登れば、人をして心曠く、流れに臨めば、人をして意遠からしめ、書を雨雪の夜に讀まば、人をして神清ならしめ、嘯を丘阜の嶺に舒れ

ば、人をして興せしむ、

石壓して筭斜に出で、岸懸つて花倒まに生ず

心光

濁りなき心の水にすむ月は

波もくたけて光りどぞなる

心の城郭

心に城郭を構ふべし、心の城郭は人破りかたし、石をつみ池を掘り水を貯へ、専ら之を以て敵を防がんと欲す、敵も亦謀計なきにあらず、石を崩し地を割き水を落すときは則ち城郭は平野となるなり、恩恵を施し國土を撫育するときには則ち誰ありてか吾に敵をなさん、是心の城郭なり、

心の塵苦

世人營利の爲に纏縛せられて、動もすれば塵世苦海と云ふ、知らず雪白く、山青く、川行と、石立ち、花迎へ、鳥笑ひ、谷答へ、樵謳ふ、世亦塵ならず、海亦苦ならず、彼自ら其心を塵苦にするのみ、

春色高下なし、花枝自ら短長

心猿

世の中は富より出る牛の尾の

引かぬにとまる心ばかりぞ

心事と才華

君子之心事は、天青く月白し、人をして知らざらしむべからず、君子の才華は、玉韞珠藏、人をして知り易からしむべからず、

心事の現空

風疎竹に來り、風過ぎて竹聲を留めず、雁寒潭を度る、雁去つて潭影を留めず、故に君子事來つて心始めて現はれ、事去つて心随つて空し、

心性四段

氣象は高曠を要して、疎狂なるべからず、心思は鎮密を要して瑣屑なるべからず、趣味は冲淡を要して偏枯なるべからず、操守は嚴明を要して激烈なるべからず、

語人をして會せしめず、人を得て之を譯せしむ

心裡の虚實

心虚ならざる可らず、虚なれば義理來り居る、心實ならざる可らず、

實なれば物欲入らず、

心遠き處

機息む時、便ち月到り風來るあり、心遠き處、自ら車塵馬跡なし、何ぞ痼疾の丘山を須ひん、

苦心

無能和尙

なか／＼に身を思はねば身がやすし

身を思ふに身は苦しけれ

疑心

春風に綻びにけり桃の花

枝葉にのこるうたがひもなし

麝香石竹に眼り、鸚鵡金桃に啄む

守り本尊

一生の守り本尊を尋ねれば

朝夕たべる飯と汁なり

中庸

花は半開を看、酒は飲んで微酔す、此の中大に佳趣あり、若し爛熳醜醜に至らば、便ち惡境を成す、盈滿を履むもの、宜しく之を思ふべし、

延促と寛窄

延促は一念に由り、寛窄は之を寸心に係く、故に機間なる者は、一日千古より遙かに、意廣き者は、斗室も寛うして兩間の若し、

名聞は諸道の敵

名聞は諸道に好まざるなり、然りと雖も實にあたるべきは則ち可なり、名は外より揚げる所なり實に我に在り、名に求めすと雖も、實我にお

るときは則ち人これを揚げる、實に當りてあかるときは則ち可なり、
虚名は拙し、

行ては到る水の窮る處、坐しては看る雲の起る時

名根と客氣

名根抜かざるものは、縦ひ千乘を輕んじ一瓢を甘んずれども、總て塵
情に墮つ、客氣融らざるものは、四海を澤し、萬世を利すと雖も、終
に剩枝を爲す、

勞力と使用

紙を徒らに費す童男あり、之を戒めて曰く、往古紙なし片竹を編みて
以て書を爲す、故に書を編むと云へり、後漢和帝の時、蔡倫字は敬仲、
初めて樹膚及び敝布を用ひて之を爲る、今の爲る所のものは楮皮なり、

先づ其楮を植ゑ、培養して時至りて、之を剪り皮を剥ぎ、水に漬し麁
皮を去り、搗爛し水に洒し、粘滑のものを熟和して、後その紙を製する、
簾の長短の量に應じて紙となして、此後一紙々々悉く板の面に張り、
之を乾し、乾きて後剝取りて五十枚を以て帖々とし、これを切り一帖
を重ねて一束とし、以て功を終る、一紙輕しと雖も、此勞を思ふとき
は則ち重し、輕んずべからず、人の勞を知る時は則ち人の爲に非ず、
我身を補ふにあり、

奇特

自性を了らざる人は物に就て奇特を見る、眠未だ盡さず、眞理に至るも
の奇特なきを以て奇特とす、凡人の奇特と思ふ處あらば、其人は至人
にあらず、至人は奇特なし、奇特無きを以て奇特とす、奇特なきの奇
特、凡人の得ざる所なり、

劔は甌人の手に握り、魚は謝郎が船にあり

澄徹と沈迷

性天澄徹すれば、即ち餓て喰ひ、渴して飲む、身心を康濟するに非ざるはなし、心地沈迷せば、縦ひ禪を談し、偈を演ふるも、總てこれ精魂を播弄す、

有爲轉變

宗

鑑

やがて見よ棒くらはせん蕎麥の花

是れ露滅

晨に起きて南郊に出づ、征衣冷かにして鐵の如し、迢々たり青松の道、再々として寒雲結ぶ、疊嶺毎に崔巍、山窮て路絶わんと欲す、小橋危壑に架す、思理雲策を繰す、崎嶇として翠微を穿てば、中に法王の闕

あり、重門亦た窈窕、僧老いて眉雪の如し、貧を迎へて屣を倒にすることを解し、軒渠として笑うて相接す、石隙に新泉を取り、銅瓶に雀舌を烹る、小樓絶崖を瞰ひ、窓を開いて明月を待つ、松風凍耳を吹いて、濤聲會て歇まず、我に枯華の旨を問へども、一字も説く能はず、我に新詩を寫せと乞へば、便ち堤頭の決するに似たり、道ふ勿れ文字禪と、恐らくは是れ露滅ならん、

水流れて元と海に入り、月落ちて天を離れず

浮漚

樂 普 和 尙

雲天の雨庭中の水に落つ、水ト漂々として漚の起るを見る、前なるものは既に滅して、後なるもの生ず、前後相續いで窮り已むことなし、本と雨滴に因つて水漚を成す、還て風の激するに縁つて漚水に歸す、

濕水性の殊るなきを知らず、他の轉變に隨うて將て異と爲る、外は明瑩にして内は虚を含む、内外玲瓏として寶珠の如し、正に澄波に在つて看るに有るに似たり、動著するに及んで又無きが如し、有無動靜事明かなり難し、無相の中、有相の形、唯濕の水中に向つて出づることを知る、豈に水の亦濕より生ずることを知らんや、權りに濕水を將て余が身に類すれば、五蘊虚く攢まつて假りに人を立つ、蘊空にして濕不實なりと解達せば、方さに能く明かに本來の眞を見る、

眞理

高いやまから谷底見れば瓜や茄子の花盛り

臘雪天に連つて白く、春風戸に通つて寒し

迷悟差別なし

誌公和尚

迷ふ時は空を以て色となす、悟れば即ち色を以て空となす、迷悟本と差別なし、色空究竟して還つて同じ、愚人南を喚んで北となす、智者は西南なしと達す、如來の妙現を見めんと欲せば常に一念の中にあり、陽燄本と其水にあらず、渴鹿狂に趁て恐々たり、自身虚假不實なり、空を將て更に空を見めんと欲す、世人の迷倒至つて甚し、犬の雷を吠へて吠々たるが如し、

禰の根原

榮西禪師

奥山の杉のむらだち兎もすれば

おのが身より火を出しける

鏡は金殿の燭を分ち、山は月樓の鐘に答ふ

何處にも青山あり

神儒佛の道を考ふるに、教の事は知らず、儒道は盛んに行はれて佛道の衰たるは歎しき事なり、如何となれば、裏店の隅に三隅を擧る先生を初として光る物に縁遠く、貧窮の穴より己々の身を守り、道の爲とはなる事なり、宮柱なんどに木の子を見せて大破の理はりも皆、是神道の正に行はるゝこと尊き事なり、箱根の山中にて駕籠昇の薪を脊負ふ翁は、今は昔の歴々、何を種とて芋の草をヒンむしる事なり、佛家には堂塔伽藍の光を放ち、出家は錦にくるまり、二人果にて地行の仙となるは、道の裏と知るべし、貧窮に住して、石上寒巖の窟に在して、自己の骨折、道にも到るべき事なり、今時の僧を見ると、我慢の波高く、公事沙汰多し、道に志ある者は理屈の穴を出で乾坤を獨歩し、鷹鳥の眞似して水を呑むことなり、是みな富貴に屬して生死に流轉するが故なり、道を外にして酒色の中へ魂飛び、俗中の俗を笑ふべし、昔

は居士院號は高位にあつて或は池下にも其徳ある人を稱する事なり、今時は悪水土泥の邊、蒿の葉に埋み茶も足らぬ石牌にも、大欲院阿房居士なぞと書付、裏には肴屋の六助、抑も百旦那には心經一卷、中には一くだりつ、鯖を讀み、佛も如來文旨なる物ゆゑ、默然と扶香喰て居る事なり、入佛ことこの献立は鹽の辛ひ茄子の香の物、餓鬼に唐辛の付焼、近年月牌と云ふ事初り、何萬人なりとも取込勝負、朝夕の佛飯を見るに猫子の飯はどならではなし、中々精靈の口濡らすことはさて置、仲間喧嘩にて天窓はり合餓鬼道の苦となる事なり、夫ゆゑ益、彼岸に来る逆も、夢中にて我も〜と門違ひなく飛込ことなり、コレ〜先生、それは理屈の味贈漬とて、聲の大きな方が勝喧嘩、寺の罪ばかりにも非ず、其施主ども大欲心、同じ山師の寄合、油斷なる事にあらず、今時は出家衆にても覺への有る事にて天地あらん限りは扶持すべしと

請負ども、誠にして焚出し渡す時は、先祖へ不孝、兩人の阿房第欲心、同罪にして瘦馬に附ても權衡平にして、問屋場の業の秤にて喧嘩顔して六十貫、なんぞ極樂のたて荷札にても、此間の大由にて死出の山路の廻り道、西の河原も大水にて、爐鞍橋も落、業人どもの骨を集め材木としてし掛橋となす事なれば、なか／＼埒の明く事にもあらず、今は弘誓の舟渡し、經帷子まげても、六道錢の底はたいても、馬士が合點する事にあらず、西六、出立、その喧嘩は己が貰ふべし、六十貫でも百貫でも、地獄の沙汰も錢次第、坂は照る／＼鈴鹿は曇る、

一片の月海に生じ、幾家の人樓に上る

三つの魂

コレ／＼童子此臺の上へ登りや、竹田の口上云つて聞すべし、サテ御

目通り飾り置きたる操は、竹生島不埒遊びと申す細工でござります、最初は此人形に魂が三つありて、其一は靈々として鏡の影に願ふが如く、善惡の隔もなく、本より明にして分別の臺をはなれます、其二は名利の間に交り、手習學問を致し寺澤流より唐様に移り詩歌の花に汚れ、其三は酒色の中へ飛び美服器財に奢り、糸竹へ音を入れ、出口の柳と化け、提灯と消えます、サテ右の三つの魂を、君臣に譬へて夫々の家を修まず、然るに二臣の放埒より終に其君を掠め、主人は本より何の分別も無きものにござれば、國を奪れ家を失ひ、今は行衛もなく荒野の花となり、サテ例の二臣の世となり、名利の岐に我を忘れ、酒色の市に人と争ひ、終に宗門帳を出し、勘當帳に入ります、此時一門の人形打寄り評議として、何卒その君の魂を呼返し、父母生來の家を相續させんと存し、佛家では目蓮の通力を習ひ、儒門には宰我か辨舌を

傳へ、その魂の有家を尋ねます、首陽の蕨も焼盡して、左様の賢君も見ぬす、今狐狸の住居となり、信田の森と化ます、奢と己味の細工に御座りますれば、度々家を失ひ命の及ぶ事、ゆるくと御一覽の程を願ます、

山花聞いて錦に似たり、潤水湛えて藍の如し

因果

馬の糞、元をたゞせば野山のすゝき、さりとくす鳴かせた事もある

果報の遠近

夜途に行くに、善人さきに行きて殺害に逢、悪人後に行き逃遁る、何事ぞ、善人害に逢ひ、悪人幸ひを得る、天の加護と云ふことは、此にはあらざるか、これはこれ天道なり、善人として引上げ悪人として推下さ

ば、天道にあらず、天道は悪人をも捨てず、善人は猶捨てず、善を取り悪をすつるは天道にあらず、これ人間なり、然らば善を作して善ならず、悪をなして悪ならず、唯自然なり、恐らくは天と云ふもあるへがらすと云ふか、否然らず、悪積りて其の身必ず亡ぶべく、善積んで必ず其身立つべし、彼の夜途に先さを行くもの善人なるを、天これをして先立しめ禍難を與ふるにあらず、その人自ら行きて禍難に遇ふ、天の作す所にあらず、その人現今に悪人にあらずと雖も過去の業残ることあり、此にあひて不意に人に先立ちて難に遇ふ、また一人の悪人後れて難を遁るゝも亦過去の業、心感することありて一旦難を遁るゝなり、これ又一生の悪にあらず、一生の善にあらず、近きときは則ち一生の裏に報を見、遠きときは則ち復生のとき報を見る、そのときに行くこと不意なりといへとも前業あり前業の成は不意にあらず、唯不意なり

とあり、

人生百に満たず、常に千載の憂を懐く

鬼神

物各其始め幽微にして、見る、所僅かなるもの也、寡の長する所世を驚かすに及ぶものなり、人は只始めを見て長する所を見ざる故に怖れず、爛々たる火、纒なりと雖も之を救はざれば一城を焼亡す、涓々たる水、纒なりと雖も寡の足る所大船を泛ふ、人生れて靜なるを性といふ、性に於て不善なしと雖も、此人長し壯んなるに及び、人を殺し盜をなし、一家を喪し敗り、一城を燒亡ぼす、世の人本を知りて末を知らず、鬼神の事において論多し、其本を問ふときは則ち纒に氣を指す、禮記祭義に云ふ、宰我か曰く、吾鬼神の名を聞く、其所謂を知らず、

孔子のたまはく、神と云ふは氣の盛なる也、魄と云ふは鬼の盛なるなりと爾云ふ、一氣僅に上りて毫芒の如し、其盛なるに及んで神の名あり、氣と云ふは魂なり、鬼は魄也、夫子のたまはく、衆生必ず死す、死すれば必ず土に歸す、是れを鬼と謂ふ、骨肉不陰に斃れて野土と爲り、其氣上に發揚して昭明焄蒿悽愴と云々、衆生死して野土に歸す、これを鬼と謂ふ、鬼の盛なる上に發揚してこれを魄と謂ふ、魂魄合してこれを神と謂ふ、また天子のたまはく、百物の精神著る、なりと爾云ふ、百物の精上り結りて神と成る、大廟の神、玉岳四瀆の神、社稷各聖人これを祭りて儼にするなり、

天臺華頂秀で、南岳石橋高し

地獄

夕月や鍋の中にて啼く田にし

餓鬼

花散るや呑みたき水を遠がすみ

畜生

散る花に佛とも法とも知らぬかな

修羅

聲々に花の木陰のはくらかな

人間

咲く花のうへにうごめく衆生かな

天上

霞む日やさこ天人の御退屈

六月松風を買はひ、人間恐らくは價なからん

佛字

死んでから佛といふは何故ぞ

こゝともいはず邪魔にならねば

率兜婆

芭

蕉

あなたうと、あなたうと、簀もたうとし笠も尊し、いつれの人かかた
り傳へ、いかなる人か寫しといめて、千載のまぼろし今こゝに現す、そ
のかたなる時は魂もまたこゝにあらん、
簀も尊し笠も尊し、

たうとらや雪ふらぬ日も簀と笠

光明と暗昧

心體光明なれば、暗室の中青天あり、念頭暗昧なれば、白日の下駭鬼を生ず

頭に午夜の月を戴き、脚に黄金の地を踏む

練達と朴魯

世を涉ること浅ければ、黠染も亦浅し、事を歴ること深ければ機械も亦深し、故に君子其練達ならんと、朴魯に若かず、其曲壯ならんと、疎犯に若かず

福 禍

福徴むべからず、喜神を養うて以て福を召すの本と爲さんのみ、禍避くべからず、殺機を去つて、以て禍を遠くるの方とならんのみ

禍福と心事

福は事少きより福なるはなく、禍は心多きより禍なるはなし、唯事を苦む者、方に事少きの福たるを知る、唯心を平かにする者、始めて心多きの禍たるを知る、

頑空に墮落

寒燈焰なし、徹裘温なきは、總て是れ光景を播弄す、身竊木の如く、心死灰に似たるは、頑空に墮落することを免れず、

西風一陣來り、落葉兩三片

士之卷

破れ草鞋

鳥尾得庵

近來禪を學ぶと稱し、禪を會すると稱するもの、稻麻竹葦の如く、此の世間に極めて澤山ある、左れを眞個作佛の大志ある者は、太甚だ稀じや、唯自ら禪と思ふ禪を學び、禪と思ふ禪を會するのじや、乃ち禪を以て一種の學術の如く思ふは、大なる錯じや、元來禪に學ぶ可きの法もなく、會す可きの道もない、其の之あるは作佛の修道じや、見性の方便じや、故に眞實之を學ぶ者は、无學の位に至り、眞實之を會する者は、不會の地に達す、從前の惡智惡覺を脱離して、滿目青山舊相識の時節がある、茲に至りて何の禪道とか説かん、何の佛法とか説かん、禪道佛法、俱に破草鞋じや、

簑笠

樵客漁人受用全し、何ぞ須ひん曲縁木床の禪、芒鞋竹杖三千界、水は宿し風は殮す二十年、

洗衣

一 茶

あの桃も流れ來よ〜春霞

露に泣く千般の草、風に吟す一様の松

春の山風

蒲生氏卿の病に伏し給ひしに、利休とぶらひけり、此人茶の湯の師なりしかば、病間へ入れて對面あり、利休病のありさまを見て、御煩ひ御養生中と見ゆ候、第一にはお年も若く、文武二道の御大將にて、日本に於て一人二人の御大名なれば、彼につけ此につけ、大切なる事を

もに候、慮外ながら御保養おろそかなるやうに存ず、御油斷あるまじ
 く候といひしかば、氏卿

かぎりあれば吹かねど花はちるものを

こゝろみぢかき春のやまかせ

とあり、利体涙を流して、殊勝千萬の事かなどいひ、暫しは物をも云
 はずして、さやうに候へどもといひながら涙をおさへて、

降ると見ばつもらぬさきに拂へかし

雪には打れぬ青柳の枝

春心

草鞋瘦脚知音を没し、露柱同行我吟に伴ふ、鏡に雲神十萬貫あり、杜
 鵝血に啼て春心を託す、

一夜落花の雨、滿城流水香し

八算の花鳥

風雅の道を楽しむ人は萬物の理を明らめて、造化の根元を知り、己々の
 本来無根の發明する時は我慢なし、理屈を離れて月花の造化を出て、
 造化に遊ぶ事なり、上手と名人との境は一步千里の遠ありて、自在の
 働とは云ふべし、世界にあらゆる理屈を並べて、内には無盡の不理屈
 阿房を知るべし、人情の遠道に晝寢の枕をあぐれば、親仁白眼んでい
 はく、親代々の寶は寂滅無樂、世の中のあらゆる山事も、譯の有だけ
 仕盡して、手前剃の頭に蝙蝠羽織、出家かど聞けば、肴を喰ひ、道人
 かど問へば、我慢の波高く、己が心の花鳥を知らず、木綿の俗首にか
 け、やかましき池の蛙や、淀の浮草の行術たづねて露霜にうたれ、芳

野の花には、人の燒飯を糲じ、田家の邊を小言云うて歩行もあり、本草綱目を考るに、鳥の部にもあらず、虫の部にもあらず、眼の早き事鷹の如く、口の廻る事車輪の如く、近年是に風流仲間と云ふ事出来て、その流を争ふ、童子の喧嘩に似たり、色に溢するものあり、狂ふものあり、紙に書た味噌蓋も破れて、心の花鳥に遊ぶ翁も堀さらいの損より、風呂ふき大根の買置にいたるまで、説玉ふところの風流は皆、餅春歳旦の花鳥なり、隣の音を今一白聞て寝るも年忘れの花鳥、佛家には、内儀法界小童無益、と説玉ふ、夫婦は姿の花鳥に遊び、恣は心の花鳥なり、山鳩の小言も詩經の周南に譽られて、心の花鳥にたどふ、親仁の小言も塵功記に譽られて、八算の花鳥にたどふ、

始めは芳草に隨うて去り、又落花を逐うて回る

筆捨山の松風

百日の説法も今ひとつにして、日和もよく、百家八宗の先生達の取もちにて此和尚も一兩年は樂々と蒲焼にもありつき、如何にか慶快なり、井筒か風廉も心やすく、さて巻中に説残したる秘事有り、釋迦孔子も此境を遠慮して説残し、古人も夢介にて春の日を暮したる事なり、何と先生方何であらうと思召す、白いものにあらず、赤いものにあらず、丸いものにあらず、春風には嵯峨芳野の山さくら、その鳴聲雷の如く、是を放てば六合に彌り、是をまけば退て一に歸す、我こゝに、天地の妙理を書顯はさん、考ふるに、古人に遠慮して筆捨山の松風とは成けり、愚の至りとして忘れたるにはあらず、元來知らざるが故に古人に遠慮する事なり、我等もその昔は道行本にわたり、青い先生なり、寅のどしの大水にて書物を流し素人となり、やんまどんぼが一文、

秋の山猿

酒數献にいたるときは味ひなく、肴數種におよぶときはうま味なく、
煙草數ふくに及ぶときは苦みを生じ、茶數碗に及ぶときは香ばしから
ず、

乏しかりし時を忘れて食このみ

このみの多き秋のやま猿

多年籠中の鳥、今日雲を負ふて蜚ぶ

端つくり

獨りくみつくして醉臥せるに、客あり枕を動かして曰く、梅見せんと
さめて思ふに、今夢のうちに淡粧せる佳人と打語り居ると覺えしが、け
ふははからずも、これ、我かめの羅浮山に遊ばんとて、伴ひいでたま

く尋ね行く道のはど、花あれば即ち入る、あやしの極なれど、

咲きにけり梅の木の間もうめの花

林下の身

鷲嶺 裕谷

青女飛び來つて甚人に嫁す、老楓江上春より嫩し、七零八落誰れか支
へ得ん、錦袈裟を着くる林下の身

法勝寺の糸櫻

濟 北

梵苑春階にして花瓊を發す、一株傾け盡す九重城、天仙の玉帶垂れて
斜下す、界道の金繩束て縈らす、墨子収め難し移換の涙、詩人埋めす、
亂纏の情、翠楊細腰の態を學ぶと雖も、風流鶴冶の態を結ふべからず

樹は風の體態を呈し、波は月の精神を弄す

棹の歌

謠曲 江口

ふしぎやな月澄み渡る水の面に、遊女のあまたうふふ語、色めきあへ
 る人影は、そも誰人の舟やらん、何此舟を誰が船とは、耻づかしなが
 らいにしへの、江口の君の川道遙の、月の夜舟を御覽せよ、そもや江
 口の遊女とは、夫は去りにしいにしへの、いやいにしへとは、御覽せ
 よ月は昔にかはらめや、我等もかやうに見ゆ来るを、いにしへ人とは
 現なや、よしよし何どか宜ふとも、いはじや聞かじ、むつかしや、秋
 の水、漲り落ちて去る船の、月も影さす棹の歌、歌へや歌へうたかた
 の、あはれ昔の戀しさを、今も遊女の船遊び、世を渡る一節を、歌ひ
 ていざや遊ばん、

千里の眼を窮めんや欲して、更に一層樓に上る

足柄の月

謠曲 山姥

春の夜の一時を千金に換へじとは、花に清香月に陰、是は願ひのた
 まさかに、行き逢ふ人の一曲の、其はともあたら夜に、はやし謠
 ひ給ふべし、げに此上はともかくも、いふに及ばぬ山中に、一聲の山
 鳥羽をたたく、鼓は瀧波、袖は白妙、雪をめぐらす木の花の、なには
 のことか、法ならぬ、よし足曳の山姥が、山廻りするを苦しき、夫れ
 山といつは、塵泥より起つて、天雲かゝる千丈の峰、海は苔の露より
 したりて、波濤を疊む萬水なり、一洞空しき谷の聲、梢に響く山彦
 の、無聲音を聞きたよりとなり、聲にひひかぬ谷もかなど、望みしも
 げにかくやらん、ことに我住む山家の景色、山高うして海近く、谷深
 うして水遠し、前には海水、滾々として、月真如の光りをかゝけ、後

には嶺松巍々として、風常樂の夢を破る、刑嶮蒲朽ちて盛ひなく去る、諫鼓苔深うして鳥驚かずともいひつべし、遠近の、たつきも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥の、聲するとき折々に伐木丁々として、山さらに幽なり、法性峰をびねては、上求菩提をあらはし、無明谷深きよそはひは、下化衆生を表して、金輪際に及べりそもそも山姥は、生所も知らず宿もなし、たゞ雲水を便りにて、至らぬ山の奥もなし、然らば人間にあらずとて、隔つる雲の身をかへ、假に自性を變化して、一念化生の鬼女となつて、目前に來れども、邪正一如と見る時は、色即是空そのまゝに、佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり、柳は緑花は紅のいろく、さて人間に遊ぶこと、ある時は山賊の、樵路に通ふ花の陰、やすむ重荷に肩を借し、月もろどもに山を出で、里まで送るをりもあり、又ある

時は織姫の、五百機立つる窓に入つて、枝の鶯糸くり、紡績の宿に身を置き、人を助くるわざをのみ、賤の目にも見ぬぬ、鬼とや人のいふらん、世を空蟬の唐衣、拂はぬ袖に置く霜は、夜寒の月に埋もれ、打ちすさむ人の絶間にも、千聲萬聲の、砧に聲のしでうつは、たゞ山姥がわざなれや、

薰風南より來り、殿閣微涼を生ず

草庵の歌

石頭 和尙

吾れ草庵を結んで寶貝なし、飯し終つて從容として睡の快ならん事を圖る、或る時は初めて見る茅草の新なるを、破て後還て茅草を以て蓋ふ、住庵の人鎮常に在り、中間と内外とに屬せず、世人の住處我れ住せず、世人の愛處我愛せず、庵小と雖も法界を合ひ、方丈の老人相體

解す、上乘の菩薩信じて疑ひなし、中下は之を聞いて、必ず疑を生ず、此庵の懐と不懐とを問ふ、懐と不懐と主元より在り、南北と東西とに居せず、基上の堅牢なるを以て最となす、青松の下明窓の内、玉殿朱棧未だ對と爲す、納帳幃頭にして萬事休す、此時山僧都て不會、此庵に住して解を作すことを休めよ、誰か鋪席に誇つて人の買はんことを圖る、廻光返照して即ち歸り來る、靈根に耶達すれば向背あらじ、祖師の視しく訓誨するに遇ふ、草を結んで庵となし退を生ずること勿れ、百年抛却して縦横に任かさば、手を擺て便行く、且つ罪なし、千種の言、萬般の解、唯君をして長く不味ならしめんことを要す、庵中不死の人を識らんと欲せば、豈に今の遮の皮袋を離れんや、

菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見る

草庵の落首

深草元政

不幸にして世を背ける墨の衣にはあらず、髪を結はせるひつかしさにあたまを剃り、茅の軒端、竹の柱に身を輕う爰にとめおきたのしむ、心から浮世を見るに、東西に去り南北に行く人、多くは身を思ふ事業にのみ足を空になして、吉野の花のあはれをも知らず、深草の鶉の聲を聞いても、焼いてしてやりたいとばかり思ひ、後に何になる事や、かく静かならぬ事は、人間のみに非ず、山を出る雲は雨を催さんとして岫を出で、深山の麓は妻戀ふ世話に聲の限りを啼明す、是を思ふに此身は世世話に樂な事なし、惠心の作の佛一体、持てども後世を願ふためにもあらず、持傳へたる道具なれば御宿申すまでなり、極樂へ行きて樂しみたいと思ふ慾がなければ、地獄へ落つる恐れもなし、死ぬるまで生きて居やうと思へば年の寄りるゝ絲瓜とも思はず、籬のこぼれ

種の牽牛花も、ゆがまうがすぢからうがわんな物と思ひ、時雨ふる夜の
 小夜あらし、吹かうと吹くまいと、我身ひとりの苦にもならず、膝
 を容るゝ二枚敷一つにて事足り、雜煮食はぬ身にも聞かせまいとは云
 はぬ鶯の聲も快く聞き、夜着持たぬ家にはさすまいとも云はぬ依怙最
 負のない窓もる月を眺め、寝る筈の目なれば眠たければ晝もかきこも
 り、あるく筈の足なれば手の奴足の乗物、心の行く所へ迷ひあるけど、
 盗みせぬ身なれば人も咎めず、覺れた事なれば忘れた事もなし、歳
 を數へた事なれば幾つやら知らず、あら樂しや人目が人とおもはぬ
 ば、人をも人と思はざりけり。

君看よ此花枝の中、中に風露の香あり

安心ほこりたゝ記

白隠禪師

其の一

歸命頂禮御釋迦如來、やれくみなさん聞いてもくんねぬ、おらが親
 仁を何國のお人も、悉多太子か知らぬが佛か、若い時から商いすさに
 て、親の譲りの家も位もすばんと打捨て、十九の年から山へ遣入りて、
 迦蘭羅阿羅々の二人の仙人師匠と頼みて、菜摘み水汲み薪を樵りてな、
 奉公つとめて元手をこしらへ、三十年目に初めて店出し、華嚴と號け
 し結構な代物、賣つて見たれば文珠と普賢の二人は買ふたが、あまり
 高くて其餘のお客は、盲か聲か見向もせぬから、是では行かぬと分別
 仕替へて、阿舎と名づけし安もの賣かけ、口上ひねれば店先せむしく、
 お客が来るやら得意が附くやら、そこで追々代物仕入れて、商い手廣
 に方等般若に、法華涅槃とお客の機を見て、それくわてがう商い上
 手に、須達と名をいふとえい金持、滅法にはれ込み、祇園精舎と名

を呼ぶ屋敷を、御釋迦にあてがひ店出しさしたら、早速其名が諸方へ
 廣まり、どつてもない程商い繁昌、天上天下に一人の親仁だ、譽めて
 もくんぬぬ、其時妙法秘密の精藥、法華の一法盛んに流行つて、お若
 い坊様龍女と申すがこれを買受とつくり吞込み、成佛したらば我等の
 嬢とはどぬらう違いた、

家貧にして未だこれ買ならず、道貧にして人を懸殺す

其の二

又々その時阿闍世と申した無敵の王様、提婆達多と心を合して、御釋
 迦の店をば仕舞つてのけよと、已が母者人章提希夫人を牢屋へおしこ
 み御釋迦の代物買はさぬ了簡、そこで夫人は不樂閻浮と此世を厭ふて、
 智慧も元手もござらぬけれども、五障三從かさなる大病、なほも藥が

あるならお頼み申すと、遙かに向うてお願ひなされば、御釋迦は承知
 で五三の相だよ、このよなお客が大方あらうと、四十餘年の長の月日
 を、御藏へ納めて仕込んで置いたが、さらば是から賣りかけませうと、
 阿難目連二人の手代を、左右に召連れ王宮さしてな出現なされて、章
 提希夫人に彌陀の本願他力の稱名、五劫載思惟の藥味を、ひとつに合
 して六字の丸藥、一向專念産前産後にさし合ござらぬ、智慧も元手も
 ばらばりいらぬ、口にまかせて唱ふるばかりだ、心想羸劣未得天眼、
 智慧が虚弱で元手の足りない、御脉も見抜いた五障の重病、まして難
 治の極重惡病、これらの性には是より外には用ゆる藥は、さつばりな
 いふとお勧めなされた、夫人は元より五百の侍女まで、無始よりこの
 かたつくりし罪業、煩惱疑惑の癩氣の持病に、三世の諸醫師もお匙を
 投げたか、其場で現益阿耨多羅々々、汗が流れて即日平愈、なんと皆

さん六字の丸薬用ひて見なさい、元手のいらぬが肝心かなめだ、

世尊密語あり、迦葉覆藏せず

其の三

あんまり無造作で祖父婆々だましの店代物かどチツクリ疑ひ、何ぞ利口なものはないかと智識に問ふたら、直指人心見性成佛、御釋迦が則ち莞爾と笑へは、迦葉が莞爾と笑うた請賣、是が本法一嗣相傳、實の眼を開いて見たれば、御釋迦も我等も是は何物、本來面目無一物とは、こりやまたどえらい掘出し物だと、座禪をはじめてやらかしましたか、膝がふり／＼ふりつきますやら、眠りが来るやら脊をどやされ大きなお目玉、爰がなんでも辛抱どころと。さばつて見たれば、三年むかしに隣へかしたる、黑豆三合糖一升、思ひ出して忌念々々、これも我等

が性にあはねい、商賣かえうと眞言秘密を、そのよな物だと尋ねて見たれば、阿字本不生で自身の胸にも阿字が備はり、羅字はもとより差別どわかれて、五智も五大も金胎兩部も、此胸一つて父母の腹から生れた所が、直に佛の位でこんすと聞くとそのまゝ、ランアポキヤなるとやりたれども、元手も持たずに自力の商賣、阿字なものにてさつぱり知れぬい、そこで圓頓妙法蓮華即身成佛、扱も無上の妙劑なれども、我等が根機に及びもないゆゑ、題目ばかりの功能看版、讀んで見たれど元手がないから代物買はれず、

無手の人拳を行し、無口の人叫喚す

其の四

四十餘年の未顯眞實、何の事だど求めて見たれば、六字の名は法華